

## 論文

## 配偶者を亡くした自死遺族が望む情報提供と支援

——地域における支援実践への寄与——

大倉高志<sup>1)</sup>・引土絵未<sup>2)</sup>・市瀬晶子<sup>3)</sup>  
田邊 蘭<sup>4)</sup>・中山健夫<sup>5)</sup>・木原活信<sup>6)</sup>

**要約：**本研究の目的は、自殺で配偶者を亡くした遺族が自殺発生直後から間もない時期に、いつ、誰から、どのような情報を、どのような方法で提供されることを望んでいるのかを明らかにすることである。フォーカス・グループ・インタビュー（以後、FGI）を3回実施した結果、自殺と判明した直後以降で、警察や行政窓口をはじめとする既存の専門家や関係者が遺された配偶者の対応をした時に、遺族の苦しさに配慮した手厚い対応が求められた。特に、遺された妻が、「最も身近にしながら夫を死に追いやった妻」として強い責めを受けたり、夫の生前からの困難や新たに生じた課題を一手に抱え込んだりする傾向がある。そのため、先に同じ経験をした遺族や、十分な研修を受け遺された配偶者の気持ちと解決策を熟知した専門家が、遺された配偶者と一緒に動き、困難を解決するため橋渡しをすることが有効な場合がある。今後も続柄に着目した調査が必要である。

**キーワード：**自殺で遺された配偶者、情報提供、支援、グループ・インタビュー

## 目次

1. 背景と目的
2. 方法
  - 2-1. 対象者
  - 2-2. 調査方法
  - 2-3. データの分析
  - 2-4. データ分析の信頼性の確保
  - 2-5. 倫理的配慮
3. 結果
  - 3-1. 対象者の背景
  - 3-2. FGIの実施時期と所要時間、並びに情報提供を実施することが望まれた関係者
  - 3-3. (a)～(d)のカテゴリーのそれぞれにおける3つのグループの比較の結果
4. 考察
  - 4-1. 情報提供について望まれた(a)時期・(b)実施者・(c)情報・(d)方法についての考察

1) 同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程  
 2) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所  
 3) 関西学院大学人間福祉学部  
 4) 関西電力病院医療福祉相談室  
 5) 京都大学大学院医学研究科  
 6) 同志社大学社会学部

\*2012年12月18日受付、2013年1月23日掲載決定

## 4-2. 総合考察

## 5. 結論

## 1. 背景と目的

1998 年以降、年間自殺者数が 3 万人を超える状況が続いており、突然遺族となる世帯が後を絶たない（内閣府 2012）。自殺で家族を亡くした遺族（以後、自死遺族、或いは、遺族）は、スティグマへの悩み、家族の自殺を恥ずべきこととする意識、自分が家族を死に追いやったという罪悪感や自責の念、故人から拒絶されたという感情の他、死因を隠しておきたい感情を抱く傾向がある（Clark 2008；Cleiren 1993；Hawton ら 2003；2008；Sveen 2008）。そのため、遺族が問題解決や回復に必要な情報や支援に辿り着けないまま孤立を深めている危険がある（Cleiren 1993）。社会的な孤立については、自死遺族に限らず、社会的な擁護を要する人々が孤立を深めていることが社会問題として認識され、厚生労働省（2000）も検討会を開催し今後の方向性を提起した。このような中、長崎県自殺対策専門委員会（2008）と厚生労働省研究班（伊藤 2009；川野 2009）がそれぞれ自死遺族支援用の手引きを発行した。また、川野ら（2009 a；2009 b）、川島ら（2010）は自死遺族のソーシャル・サポートと二次的被害について多面的な成果を報告している。さらに、小山（2006）、寺岡（2012）は遺された配偶者に焦点を当てており、個別性の解明に向けた動きもある。大倉ら（2011）は、配偶者を亡くしたグループ、子を亡くした親のグループ、親を亡くした子のグループのそれぞれ 4 人ずつのグループを設定し、遺族が自殺発生後に、いつ、誰から、どのような情報を、どのような方法で提供されることを望んでいるのかについて続柄の違いに着目し、FGI による調査を実施した。その結果、自殺と判明した直後から葬儀後までの時期の情報提供や、遺族コーディネーターのような新しい職種や体制による情報提供や支援の他、警察や行政死亡届窓口、葬儀社などの既存の専門家からの自死遺族に特化した関わり、口頭での説明よりもリーフレットや冊子をさりげない形で封入して提供、などの共通点が明らかになった。大倉らの調査は、とりわけ支援策の具体化が急がれていた我が国において、自死遺族支援施策に活用可能なエビデンスを提示したという点で意義があった。しかし、実際には、3 つの異なる続柄の遺族に対し、それぞれ 1 回ずつの FGI を実施した調査であったことから、続柄の違いに基づく支援の特徴や差異を特定するにはデータの量が不足していた。

以上のような背景から、本研究では、対象とする続柄を「自殺で配偶者を亡くした遺族」に限定し、大倉ら（2011）の分析データのうち、配偶者を亡くしたグループのデータを再分析し活用しながら、自殺発生直後から間もない時期に、どのような情報提供が

望まれるのかについて明らかにすることを目的とした。

## 2. 方 法

本研究は、FGI による質的研究である（Krueger 2009；Ritchie ら 2003；鈴木 2005）。

### 2-1. 対象者

対象者は、配偶者を亡くしてから3年以上が経過しており、かつ日本国内で活動している自死遺族自助・支援グループに中心的・協力的に関わっている遺族とした。対象者の募集は、これらの自助・支援グループから紹介を受けた候補者に対し、筆頭著者が直接訪問の上、調査の趣旨と目的を口頭で説明し、十分な理解と書面による同意を得て実施した。

### 2-2. 調査方法

調査は、対象者の当時の「子の有無」と「子の年代」を考慮しながらグループの属性を設定し、合目的的サンプリングにより対象者の募集を実施した。第1回 FGI（以後、FGI-1）（大倉ら（2011）報告分の一部）を実施し、その分析後、第2回 FGI（以後、FGI-2）で新たに募集する対象者の属性を検討した。その際、FGI-1 では、偶然にも4名の対象者が全て「子がいなかった」ため、FGI-2以降では「子がいる」遺族に着目し、「主に成人した子がいる家庭で配偶者を亡くした遺族」を FGI-2 の対象者として設定した。また、第3回 FGI（以後、FGI-3）の対象者として、「未成年の子がいる家庭で配偶者を亡くした遺族」を募集することとした。FGI-2 の対象者を募集し、FGI-2 を実施・分析した。さらに、FGI-3 も対象者を募集し、FGI-3 を実施・分析した。そして、最後に、全3回に渡る FGI の分析結果を比較・考察した。

筆頭著者が司会者として、また、共著者のうち同一の1名が司会補助者として全 FGI に同席した。対象者には、司会者と司会補助者がいずれも精神保健福祉士であることを予め伝えた。FGI 実施前に事前アンケートを実施し、1) 対象者本人の続柄と当時の年齢、現在の年齢、死別後の経過年数、信仰していた宗教、2) 故人の続柄と享年、自殺手段、信仰していた宗教、3) 子の有無、子がある場合は子の性別と年齢、4) 死別後の諸手続きの主な実施者は誰だったか、5) 直後に望まれた情報は何だったか、6) 現在望む情報は何か、以上の各項目について記入を求め、分析資料の一つとした。

FGI の質問項目として、遺族が望む情報提供のあり方について、(a) 情報提供の時期、(b) 情報提供の実施者、(c) 提供してほしい情報、(d) 情報提供の方法の4つの項目を予め設定し、対象者自身の体験だけでなく、同じ続柄の人を亡くした他の遺族から

見聞きしたことに触れながら自由に討議する形で進行した。司会者は特記すべきであると感じた対象者の言動を、司会補助者は対象者が発言した (a)～(d) をそれぞれ用意した記録用紙に記入した。FGI 実施後、事後アンケートを実施し、1) 言い足りなかったことや言いにくかったこと、2) 意見や感想、以上の各項目について記入を求め、分析資料の一つとした。

### 2-3. データの分析

分析は、Glaser ら (=1996) が提案した Grounded theory と木下 (2003) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにおいて提案されている分析ワークシートの手法や佐藤 (2008 a; 2008 b) の演繹的アプローチと帰納的分析を参考に設計した。分析の概要として、まず、語り全体の概要を細部まで厳密に把握するため、逐語録からコードや概念、カテゴリーを作成する帰納的分析を実施し、語り全体の内容をコード・概念・カテゴリーで整理した一覧表を作成した。その後、一覧表を土台としながら、「情報提供」について予め設定した要素である上記の (a)～(d) の4つのカテゴリーに該当する語りを抽出する演繹的分析を実施した。筆者らはこれらの方法を複合的に活用することにより、自死遺族が望む情報提供と支援を余すところなく浮き彫りにすることを目指した。分析には、質的分析支援ソフト MAXQDA 10 (以後、分析ソフト) を活用した。

具体的な分析の手順を以下の通り明示しておきたい。

#### 〈分析の基礎的作業の手順〉

①分析ソフトで対象者の属性表を作成。②IC レコーダーの音声データから逐語録を作成し、対象者の非言語的反応（表情や様子、態度、声の抑揚など）を記録した後、個人名や所属、固有名詞など個人が特定可能な箇所を記号化した。③逐語録を印刷し、(a)～(d) に該当する箇所と、特徴的だと思われる箇所にアンダーラインを引きながら熟読。同時に、話の流れに注意しながら話題ごとにコード（要約文）を作成し、逐語録の横に併記。④逐語録の Word ファイルを分析ソフトに保存・認識させ（インポートし）、分析ソフト上で作業できるよう準備。記入したコードと、(a)～(d) に該当した語りを分析ソフトの逐語録上に入力して反映。

#### 〈帰納的分析の手順〉

⑤全てのコードを俯瞰し、類似するコードを整理し、暫定的な概念名を付けた。その際、特定のコードに対し、反対事例や対極事例となるコードにはコードの冒頭に「(反)」と明示し、特定のコードと並列して表示。⑥類似するコードを集約した暫定的な概念名に対し、メモ機能を活用し、司会者と司会補助者が記録した内容や気付いた

点、司会者が分析の際に深めた考察や想起された仮説、批判的考察、概念の定義などを入力。⑦ ⑤と⑥を総合的に勘案し、この段階での概念名を確定。さらに、類似する概念同士を集約し、カテゴリーを作成。⑧グループ・インタビューであることから、作成した全ての概念に対する各対象者からの影響の度合いを判別するため、「主な発言者」と「発言者以外の対象者が示した反応」に着目し、行（左側に縦に列挙）に「カテゴリーと概念」を、列（上部に横に列挙）に「対象者」を配置した「概念－対象者の対応表」を Excel で作成した。具体的には、対象者がその特定の概念について、主な発言者である場合には「☆」、明らかな賛意を示す賛同者である場合には「◎」、逐語録全文から共感的反応者であると判断される場合は「○」、明らかな反対意見を述べた場合には「×」、発語や相槌もなく反応が特定できない場合には「？」を記入した。また、その概念が遺された配偶者に特徴的であると思われる場合には「配」を、さらに、自殺に特有と思われる場合には「自」の文字を概念の冒頭に記入し、分析・考察の際の手掛かりの一つとした。⑨最終的に作成された概念とカテゴリーへの対象者からの影響の大きさを測るための参考資料の一つとして、対象者ごとの作成コード数を把握することのできる「対象者ごとのコード数一覧」を Excel で作成した。

#### 〈(a)～(d) の 4 つのカテゴリーによる演繹的分析の手順〉

⑩言及された「情報提供の実施者（専門家や機関などの関係者）」についての発言頻度を確認するため、分析ソフトの語彙検索機能を活用し、行（左側に縦に列挙）に「情報提供の実施者（上から、「消防」、「救急隊」、「救急」、「警察」、「警察官」、「お巡りさん」、「警察署」、「駐在所」など実際の発言に応じ逐次、語彙を追加した）」を、列（上部に横に列挙）にグループ・インタビュー全 3 回（FGI-1, FGI-2, FGI-3）を配置し、各 FGI における「情報提供の実施者」の発言の回数を記入した。⑪語彙検索の結果を参考にしながら、(a)～(d) に該当した語りを「情報提供を実施することが望まれた関係者」ごとに要約・整理するため、行（左側に縦に列挙）に「情報提供を実施することが望まれた関係者」を、列（上部に横に列挙）に (a)～(d) を配置した一覧表を作成した。この時、「情報提供を実施することが望まれた関係者」に該当しない (a)～(d) の語りは、行の一番下に「その他」の欄を設け追記した。また、列の右端に語りの「目的」の欄を設け、語られた内容の趣旨が「要望」であるのか、「良い評価」であるのか、或いは「実践されている取り組み紹介」であるのかなどが区別できるようにした。

#### 〈結果と考察の記述の手順〉

⑫結果を記述する際には、この (a)～(d) の一覧表だけでなく、帰納的分析の結果も最大限活用した。⑬自殺発生直後から間もない時期に遺族への情報提供を実施すること

が望まれた関係者の (a)～(d) の中から、特に「(a) 情報提供の時期」と「(b) 情報提供の実施者」の 2 つを引用した時間軸による結果図を作成。望まれた「情報提供のあり方」を視覚的に把握する一助とした。<sup>⑭</sup> (a)～(d) のそれぞれについて、FGI の 3 つのグループにおける対象者の背景の違いを考慮しながら比較し、明らかになった結果と考察を記述した。特に、結果と考察の書き方については、田垣 (2008: 164-9) を参考にした。

#### 2-4. データ分析の信頼性の確保

分析は、カテゴリー化まで司会者が 1 名で実施した後、司会補助者と共にピア・チェックを実施し、必要な場合には再度分析作業を行なった。また、カテゴリー化が終了した後、共著者と共に分析結果を確認し分析結果の妥当性を検討した。

#### 2-5. 倫理的配慮

死別後の経過年数が「3 年以上」経過している遺族を対象とすることにより、対象者の悲嘆や混乱をさらに悪化させてしまうことがないように配慮した。FGI 実施中に対象者が体調を崩した場合を想定し、司会者と司会補助者による救護マニュアルを作成し対象者の万が一の体調変化に備えた。FGI 終了後、電話相談窓口と筆頭著者の連絡先を明記した感謝状を渡し、帰宅後の気分変調に配慮した。FGI-1 は京都大学大学院医学研究科・医学部医の倫理委員会 (No.882) から、FGI-2・FGI-3 は同志社大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会 (No.1021) からの承認をそれぞれ得て実施した。

### 3. 結 果

#### 3-1. 対象者の背景

対象者は、夫が 5 名、妻が 8 名の合計 13 名だった。FGI-1 は夫 2 名・妻 2 名で構成し、全員子がいなかった。FGI-2 は自殺発生当時に主に成人の子がいた夫 2 名・妻 3 名で構成し、子の年代は小学校高学年と中学生から 30 代前半までだった。FGI-3 は当時未成年の子がいた夫 1 名・妻 3 名で構成し、子の年代は 1 歳未満の乳児から小学校高学年までだった。FGI-2 にも FGI-3 にも、当時高校生の子がいた対象者はいなかった。故人の自殺手段は、縊首が 7 名、飛降りが 3 名、練炭・飛び込み・焼身がそれぞれ 1 名ずつだった。対象者本人が信仰する宗教は、仏教が 5 名 (浄土真宗 2 名、浄土宗 1 名、本門佛立宗 1 名、創価学会 1 名 (順不同))、神道が 1 名、キリスト教 (プロテスタント) が 1 名、特に信仰する宗教がない者が 5 名、無記入が 1 名であった。対象者の背景は、表 1 の通りである。

表 1 対象者の背景

	記号	対象者				故人			自死後の経過年数
		続柄	当時の年齢	当時の子の人数 (性別・年齢)	当時の宗教	続柄	享年	手段	
FGI-1 (当時、子が いなかった グループ)	A	夫	20 代後半	0	仏教 (浄土宗)	妻	20 代後半	飛降り	6
	B	夫	30 代後半	0	特になし	妻	30 代前半	縊首	9
	C	妻	30 代前半	0	仏教 (門佛立宗)	夫	30 代前半	縊首	8
	D	妻	40 代前半	0	キリスト教 (プロテスタント)	夫	40 代前半	縊首	25
FGI-2 (当時、主に 成人の子が いたグループ)	E	妻	50 代後半	2 (長男・30 代前半, 長女・30 代前半)	仏教 (浄土真宗)	夫	50 代後半	縊首	4
	F	妻	40 代後半	2 (長男・20 代前半・大学生, 次男・中学生)	仏教 (浄土真宗)	夫	40 代後半	飛降り	14
	G	妻	50 代後半	3 (長男・30 代前半, 次男・30 代前半, 長女・20 代前半・大学生)	仏教 (創価学会)	夫	50 代後半	練炭	3
	H	夫	50 代後半	1 (長男・30 代前半)	特になし	妻	50 代後半	縊首	3
	I	夫	40 代前半	2 (長男・中学生, 次男・小学校高学年)	神道	妻	40 代前半	縊首	3
FGI-3 (当時、未成年 の子がいた グループ)	J	妻	40 代前半	2 (長女・小学校高学年, 長男・小学校入学前)	無記入	夫	40 代後半	縊首	11
	K	妻	30 代前半	1 (長男・1 歳未満)	特になし	夫	30 代後半	飛込み	36
	L	妻	40 代前半	2 (長男・小学校低学年, 次男・小学校低学年)	特になし	夫	30 代後半	飛降り	3
	M	夫	40 代後半	1 (長男・小学校高学年)	特になし	妻	30 代後半	焼身	10

### 3-2. FGI の実施時期と所要時間、並びに情報提供を実施することが望まれた関係者

FGI の実施時期は、FGI-1 が 2009 年 12 月、FGI-2 が 2010 年 12 月、FGI-3 が 2011 年 7 月だった。対象者の自己紹介から FGI 終了までに要した時間は、FGI-1 が 2 時間 34 分、FGI-2 が 3 時間 9 分、FGI-3 が 2 時間 41 分だった。自殺発生直後から間もない時

表 2 自殺発生直後から間もない時期に遺族への情報提供を実施することが望まれた関係者

	当時、子がいなかった グループ (FGI-1)	主に成人した子がいた グループ (FGI-2)	未成年の子がいた グループ (FGI-3)
新しい提案	遺族コーディネーター	先に同じ経験をした遺族	一緒に橋渡ししてくれる人
3 グループ 共通	警察	警察	警察
	行政窓口	行政窓口	行政窓口
2 グループ 共通	葬儀社	葬儀社	
	弁護士	弁護士	
	司法書士	司法書士	
		会社の社長と上司	職場・労働組合の人
グループ 単独		学校の先生	学校の先生や養護教諭
	保健師	宗教関係者	検案・解剖担当者
	ソーシャルワーカー		

	時間軸（右に向かって時間が経過） ※望まれた「(a) 情報提供の時期」を「●」で強調
警察	遺族への情報提供を実施することが望まれた関係者（望まれた「(b) 情報提供の実施者」）
警察	「(b) 情報提供者の実施者」に繋ぐことが望まれた関係者
認知	語りから望まれた関係者の動き
（伝達）	語りから特定できなかった関係者の動きを補足的に明示
→	望まれた「(a) 情報提供の時期」
→	望まれた継続的な情報提供と支援の実施

※図は、「自殺発生直後から間もない時期」に望まれた「(a) 情報提供の時期」と「(b) 情報提供の実施者」を示したものである。

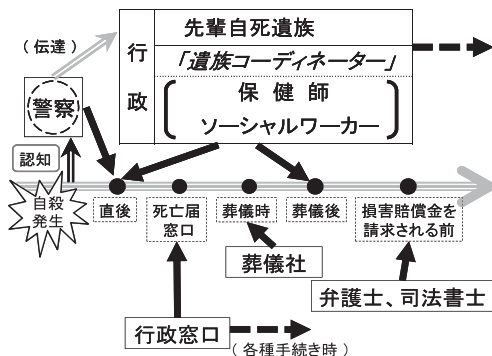


図1 FGI-1のグループが望む情報提供のあり方

期に遺族への情報提供を実施することが望まれた関係者は、表2の通りであった。

### 3-3. (a)～(d) のカテゴリーのそれぞれにおける3つのグループの比較の結果

(a)～(d) のカテゴリーのそれぞれにおいて3つのグループを比較した結果は、下記の通りであった。(グループごとの結果図は、図1、図2、図3に示した。カテゴリーは【 】を、対象者の語りは「 」を用いて記述した。)

#### 3-3-(a). 情報提供の時期についての比較の結果

望まれた情報提供の時期については、(1)【自殺と判明した直後から随時】、(2)【既存の専門家が遺族の対応をした時】、(3)【遺族が必要と感じて聞いた時に出来るだけその場で】の3つに分類され、3つとも全てのグループで共通していた。

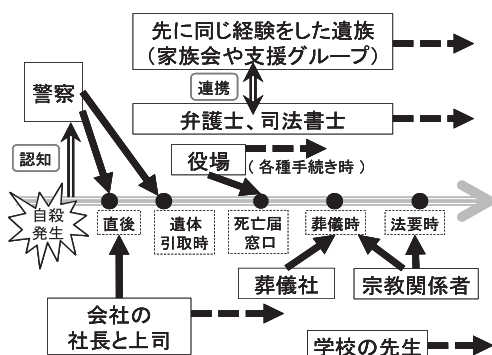


図2 FGI-2のグループが望む情報提供のあり方

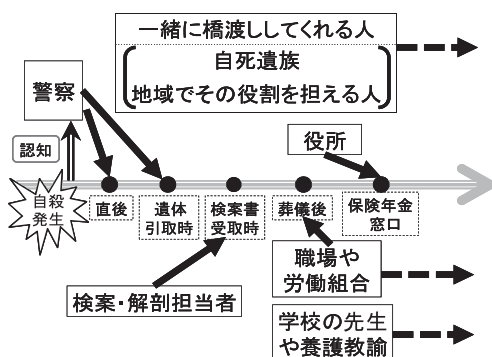


図3 FGI-3のグループが望む情報提供のあり方

- (1) 【自殺と判明した直後から随時】 についての語りの例：「だから、(中略) 偏見も含めてありますから、いわゆる自死直後のいろんな手だてとかいうのを、やっぱり少し整理をしたり、提示してもらえるとうれしいし。」(FGI-3: M 妻を焼身で亡くし、その後、自責感から息子も自死で亡くした夫)
- (2) 【既存の専門家が遺族の対応をした時】 についての語りの例：「自死遺族の会に行っ

ら、あしなが育英会というのがあるというのを初めて知って。(中略)だから、『なんでこれ、全部、行政の人、知ってるはずやん。』って思って。(中略)全部、市役所の人知ってたはずなんです。社会保険から国民保険とかに切り替える時に、旦那さんはなぜ亡くなったんですかという話は必ずあって、『自殺です。』って言うたら、『あ、すみません。』って言うんですよ。なんですみませんなのか、分からへんねんけど…。その時に教えてくれたらいいじゃないですか。』(FGI-3: L 夫を飛降りて亡くした妻)

- (3)【遺族が必要と感じて聞いた時に出来るだけその場で】についての語りの例:「やっぱり子育てっていうか、いっぱい悩んだから…。私はほんまに子どもを育てる時の悩みを、その情報をいっぱい欲しかったんやけど、なかなか、もらえず…。うん。」(FGI-3: J 夫を縊首で亡くした妻)

### 3-3-(b). 情報提供の実施者についての比較の結果

望まれた情報提供の実施者については、(1)【先に同じ経験をした遺族など】、(2)【警察】、(3)【行政窓口】の3つが全てのグループで共通して挙げられた。また、FGI-1と2で【葬儀社】、【弁護士】、【司法書士】が共通して挙げられた。FGI-2と3では【会社の社長と上司】と【職場・労働組合の人】、並びに、【学校の先生】と【学校の先生や養護教諭】がそれぞれ共通して挙げられた。さらに、FGI-1で【保健師】と【ソーシャルワーカー】が、FGI-2では【宗教関係者】が、FGI-3では【検案・解剖担当者】がそれぞれ単独で挙げられたのが特徴的だった。

- (1)【先に同じ経験をした遺族など】についての語りの例:「だから、遺族支援のコーディネーターみたいな人がいてね、やっぱりその人が遺族であればもっと良いけども。それから、自殺で亡くなって遺された人がどんな問題を抱えてるかっていうのを本当に全面的に知っていて、心のメンタルな部分で聞ける、『私は遺族だから聞けるよ』っていうのか、そういう人であって(後略)。」(FGI-1: D さん 夫を縊首で亡くした妻)

- (2)【警察】についての語りの例:「警察の人がね、『この人は利用者ですよ』(中略)っていう、その駅員の人に言ってあげるってことと、『病気なんです』って、『病気で亡くなったんで迷惑かけようと思ったんじゃないくて』っていうようなことを警察の人が口添えしてくれることで、その(遺族に請求される)賠償金の額がね、全く違うんだって。」(FGI-1: D さん 夫を縊首で亡くした妻)

「(前略)亡くなって警察に行った時に、自死ということは確実に分かっているところで、落ち着いた時に読めるように、プリントの1枚でもあったらね。もしかしたらその後、その場ではもう即開けられない資料でも、落ち着いた時に読んで、ああ、これしとかんなんのや(これをしておかないといけないんだー引用者補注)ということが分かったんかなとか思うし。」(FGI-3: J さん 夫を縊首で亡くした妻)

- (3)【行政窓口】についての語りの例:「欲しい情報としてはいろいろあると思うんですけど、一番行くのは役場なんで、役場で一括してもらえると有り難い(後略)。」(FGI-2: I さん 妻を縊首で亡くした夫)

【葬儀社】についての語りの例:「少なくとも人が亡くなれば必要なことっていうのはたくさん

ある訳で、そこはまず、きちっと（葬儀）業者の窓口であったり、葬儀場でもあったり、口はある訳だから。そこでまず最低限の情報は提供する。（中略）それは、スタートラインとして必要だと思ってますよ。」（FGI-1：Bさん 妻を縊首で亡くした夫）

【弁護士】、【司法書士】についての語りの例：「（前略）労働相談。旦那の過労自殺のことを何からしていいかわからないから。民事からするのか、労災からするのか、行政からするのか分からないから相続に詳しい弁護士と、できたら私は女性の弁護士を探したけどいなかったんです。できたら女性の相続関係のできる弁護士と、あとは労働に詳しい弁護士が直ちに必要になった。」（FGI-1：Cさん 夫を縊首で亡くした妻）

「私、司法書士の先生のところでお世話になって、（中略）（多重債務問題の支援の会）があるゆうことで（後略）。ただ、そういう方たちが動いてるっていうのって、一般の人って全然分からないんですよ。（中略）私もその会があるって事自体も分からなくて。その会でいろんな相談をさしていただいたり。」（FGI-2：Gさん 夫を練炭で亡くした妻）

「最初、司法書士に持って行って、結局、もめて訴訟になると弁護士に渡さないといけないのでね。（中略）訴訟が見えてるのは最初っから弁護士。でも、争いがないものは司法書士でもいいし。あと、戸籍触るだけだったら行政書士でもいいと思うので。やっぱ、専門家への振り方は、私、とっても難しいと思います。」（FGI-1：Cさん 夫を縊首で亡くした妻）

【会社の社長と上司】についての語りの例：「社長と上司が来まして、主人の枕元で土下座して泣いて謝ったんですね、『Fさん悪かった。許してくれ』って、それを見て、『あっ、やっぱり会社でなんかあったんや』って思ったんですね。でもそれが、社長と上司はその時はやっぱりね、主人の遺体を見て正直な思いがあったんやけども、1週間後に会社にあいさつに行ったら、『あれはどういうことを？何かあったんですか？』って聞いても（中略）『大変今までね、頑張って働いてきてくれてたんで、それでああいうこと言いました』って言うんだけど、それ以上は言ってくれませんでした。」（FGI-2：Fさん 夫を飛降りて亡くした妻）

【職場・労働組合の人】についての語りの例：「もう周りの人たちが（中略）声をかけてくれて、労働組合ももうお通夜の日に弁護士に相談に行ってくれて、『これは間違いなく仕事によるものやから、労災、公務災害を申請しよう』って声をかけてもらって申請して。（中略）組合も職場の仲間もみんな協力してくれて、（中略）公務災害が認められたんですけれども。」（FGI-3：Jさん 夫を縊首で亡くした妻）

【学校の先生】についての語りの例：「子供のことが心配で、子供の付き合いがあるっていうのは学校しかないんですね。（中略）とりあえず、頼るところがどこにあるのかっていうの知りたいんですよ、こっちとしてはね。すごい困ってる状態なんで。学校へ問い合わせても、『いや、ちょっと…。』みたいな話になって。（中略）聞いた時に即答してもらえると、すごい安心感があるんです。」（FGI-2：Iさん 妻を縊首で亡くした妻）

【学校の先生や養護教諭】についての語りの例：「最低限、自死とか自殺のことについて、例えば、母親が自死で亡くなりましたってお話を、学校に持っていった時に、具体的にその子どもとかかわっている担任の先生だとか、あるいは保健室の先生だとか、そういう先生方が、自死についての例えばある程度の見識を持っているということが必要だなと僕は痛感しました。（中略）言った時に、割と分かってないんですよ。きょんとんとして（中略）。いわゆる、具体的にその子がどうかとか、その子どもの心理的影響だとかいうことについて、クラスでどういうふうじゃあ受け止めましょうとか、いわゆるメンタルケアをどうしましょう、保

健室の先生が（自宅に）来るとかいう、そういうふうになんかなっていかなかったんですね。むしろ、クラス運営のことなんか、自死じゃなくてむしろそのことをオブラートに包みながらうまくやっていこうという、割と管理的な発想にその先生の場合はなったので、むしろ、おかしいんじゃないかなと思いつながら（後略）。」（FGI-3：Mさん 妻を焼身で亡くし、その後、自責感から息子も自死で亡くした夫）

「その学校の教育の現場にも、そういう先生ら自身もしっかりとした情報をつかんでおいて欲しいって言うか。そういう、私たちももらう情報も欲しいんやけども、先生たちももしっかりとした情報を持って遺族を支援してもらえたらね、すごく…、うん…。（中略）もう疲れ果てた時にその（先生の）言葉を聞いた時に、いっぺんにもう、ものすごくなんとも言えない落ち込みに陥ってしまって。（中略）『（亡くなった）お父さんのところに行こう』言うたら子どもに反対されて、『絶対、嫌や！！』って言うて、子どもらがすごく言うてくれたんでね、元に引き戻されたっていうことがあるんやけども。」（FGI-3：Jさん 夫を縊首で亡くした妻）

【保健師】についての語りの例：「私は、例えば行政が（家庭訪問に）行こうと思えばね、一番近いのが保健師じゃない？ もちろん各保健所にカウンセラーがいるとしても保健師さんは訪問しやすい、入りやすいっていうの？（中略）東北なんかの成功してるのは保健師さんは行っても、おじいちゃんに『血压、計りましょか？』で入っていけるとかね、すごく入りやすい。そこに臨床心理士がね、『心の具合は、いかがですか？』とかは入りにくい。（中略）だから保健師さんが一番、抵抗がない。」（FGI-1：Dさん 夫を縊首で亡くした妻）

【ソーシャルワーカー】についての語りの例：「病院なんかでさ、（中略）もっと自死遺族のあれもソーシャルワーカーがしますっていうふうなことにしたらいいんじゃない、ね？（中略）特に、一番未遂者が、病院では一番近づきやすいよね。（中略）病院で搬入された人のね、支援をするっていう意味でソーシャルワーカーが。だってさ、未遂、いっぱい問題抱えて入った人が、『はい、退院です。』って4日ぐらいで退院させられちゃうわけでしょう。（ある）県の（ある）病院に退院の翌日亡くなった人（の遺族）が（中略）『訴えたいぐらいだ！』って言ってましたけど、（中略）ソーシャルワーカーがもう全面的に関わってほしいんですよ。」（FGI-1：Dさん 夫を縊首で亡くした妻）

「今までのソーシャルワーカーはね、法律の知識全くないんですよ、無理やと思う。（中略）審理の話も法律の話も相続もできないから。やっぱり自殺、死別、その問題に関しては、やっぱりちょっと専門に欲しい、ソーシャルワーカーが。」（FGI-1：Cさん 夫を縊首で亡くした妻）

【宗教関係者】についての語りの例：「『自殺した人はあの世で身分が低い』ということで、そういう先入観があったんで、それも（お寺さんに）聞いたんです。『主人はね、こういう死に方をしたんですけども、あの世で肩身の狭い思いをしてるんでしょうか？』って言ったら、『そんなことない。人間は命絶ったらば、私たちは皆仏さんになる』と。『この世ではいろいろな階級っていうかね、いろんな暮らしあるけども。亡くならはった瞬間に皆さん仏さんになる、これはもう階級はないんだ』という教えをちゃんと saying いただいて、（中略）仏教の話だけ、それを今の生活に、私たちに結び付けて教えを言っていただけなんで、それも有り難い（後略）。」（FGI-2：Fさん 夫を飛降りて亡くした妻）

「（お坊さんから）やっぱり心の慰め、ちょっとでも言うてくれたらいいんやけど。難しいお経の話やらそんなばっかりで、それはちょっと違うやろと。今、どう生きるかっちゅ

うことを言ってくれたらいいんですけど、それがないし。もうお金のことが見え隠れするなあ、ちゅう感じで。」(FGI-2: H さん 妻を縊首で亡くした夫)

「その時に、うちは菩提寺のお坊さんが来てくださるんで、ずーっとお葬式もすべてそのお坊さんをお願いしたんですけど、それは1つのその方法かなと。」(FGI-2: E さん 夫を縊首で亡くした妻)

【検案・解剖担当者】についての語りの例：「『うちの旦那、飛び降りやんな。なんでこんなとこにメスが入ったような跡があるの?』って思って、疑問がすごいあって。(中略)そういうのでも、ちゃんと説明して欲しかったかもしれない。『こういう感じで亡くなりました。死因はこういう感じでした。』って、『直接の死因はこれです。』とか、『これは何のための傷で。』って。」(FGI-3: L さん 夫を飛降りで亡くした妻)

### 3-3-(c). 提供してほしい情報についての比較の結果

提供してほしい情報については、(1)【死別後の期限のある手続きなど必ず必要になる最低限の情報】、(2)【明日から生きていくための具体的な情報(衣食住や生活基盤を成り立たせるための情報など)】の2つが全てのグループで共通していた。

また、特に未成年の子がいる配偶者から【子どもの心理・発達面への影響、経済的な支援の他、子ども向けの分かち合いなどの集まりに関する情報】が強く求められた。具体的には、【子どもの学習上の不適応、学校での他の児童・生徒からのからかいやいじめの被害、不登校の時にどうしたら良いのか】、【子どもが生きようと思えるような遺児の集まりや経済的支援に関する情報】、【親の自殺現場を見てしまった我が子の症状や体調、心理について相談できる場所】、【小さかった子どもへ親の自殺について伝達する時期や方法】が特徴的であった。

さらに、以下は、続柄や子の有無による特徴というよりは故人と遺族の背景による特徴として、過労自殺と思われる時の【労災申請の方法】や【職場での勤務状況や事実】の他、多重債務の時には【多重債務後の自己破産と生活再建の方法】が、鉄道会社や賃貸物件の業者から賠償請求された時には【請求に従って支払う必要があるのか、減額を求めても良いのか、或いは支払わなくても良いものなのか】が、それぞれ挙げられた。

なお、死別後の諸手続きを誰がしたかについて、対象者13名のうち11名が「自分がした」と答えた。11名のうち3名が自分以外に「実親」(A)や「親戚」(J)、「実兄」(L)が手続きを助けてくれたと回答した。一方、13名のうち残り2名が「自分で手続きが出来なかった」が、いずれもFGI-1の子がいなかった妻であり、それぞれ「実姉」(C)、「義父」(D)が手続きを代行していた。他方、FGI-1の子がいなかった夫においては、【子どももおらず複雑ではなかったので死別後の手続きでは困らなかった】が特徴的だった。

- (1) 【死別後の期限のある手続きなど必ず必要になる最低限の情報】についての語りの例：「一番、一番、私の困ったことが、何も分からなくて…。(中略) まず一番頭に浮かんだのが住宅ローン。その次に、その生命保険の手続きもいつしたらいいんだろう。その時期も分からない。あと弁護士ですね。子どもがいなかったので、遺産分割必ず起こるので、とりあえず私と旦那の親、両親が相続人なのでね、子どもがいないから。」(FGI-1: Cさん 夫を縊首で亡くした妻)

「やっぱり期限を区切られたもの。さっき労災のことおっしゃってましたよね。あれは5年以内なんですね、申請が。そしたら、もしかしたら(故人が勤務していた職場が)存続してない場合もありますよね。例えば今の(社会)状況ですと。(中略) そういう期限を区切られたものの、何年以内に必要ですよ、とか。例えば『遺族年金の手続きは何年以内に必要ですよ』と。そういう期限を区切られたものの情報ってのは必要なとすごく思います。どういう書類が必要だとか。(中略)『最低これだけのものは持参して行ってください』とか。そういう的確な情報があれば。やっぱり、そういうつらい時ってのは何度も足を運びたくないですからね…。」(FGI-2: Eさん 夫を縊首で亡くした妻)

- (2) 【明日から生きていくための具体的な情報(衣食住や生活基盤を成り立たせるための情報など)】についての語りの例：「ある程度事務的なこと以外に私は明日から何のために生きていくんだろうっていうときに、その起こってしまったことをどう受け止めるかっていうのも教えてほしかった。どういうふうを考え方を変えて、発想を転換して生きていくのかの生き方を教えてほしかった。」(FGI-1: Cさん 夫を縊首で亡くした妻)

「僕なんか自宅全焼で、その日、どこに住もうとかね、どこで雨露をしのげばいいんだとか思ったし。衣食住そのものが脅かされる場合もある。その人の生活基盤みたいなものを、どう、最低限度の生活基盤を担保できるかというか。」(FGI-3: Mさん 妻を焼身で亡くし、その後、自責感から息子も自死で亡くした夫)

- 【子どもの学習上の不適応、学校での他の児童・生徒からのからかいやいじめの被害、不登校の時にどうしたら良いのか】についての語りの例：「うちのみたいに、(小学校高学年の)クラスの中では、そんな発言が、『お父さん、自殺したんか』って。それ、先生、慌ててしまってどうしようもなかったって、後で子どもに聞くだけっていう対応で。やっぱり、子どもの心ってすごく傷付いていると思うし…。そこでやっぱり先生らも、勉強しといてというかな、ほんまに一人ではよう対応せんと思うんよ。クラスで突然起こったら。それ前もって、そういう事実、起きた時点で、学校全体でどう取り組むかと考えてもらったりとか。」(FGI-3: Jさん 夫を縊首で亡くした妻)

- 【遺された子どもが生きようと思えるような遺児の集まりや経済的支援に関する情報】についての語りの例：「子どもがいわゆる、当時としては自死遺児の状態だったんですね。(子ども自身が小学校高学年の時に)お母さんを自死で亡くした子どもだった。小学校から中学校になって高校…。中学校は不登校だったんですけども(その後、高校の時に、母親の自死への自責感から子どもが自ら自死)。(中略) あしなが育英会なんかの、いわゆる自死遺児の交流とか、集まりだとか、あるいは経済的支援のイメージがわくような情報が、もし僕自身というよりも、子ども自身にその情報が入っていたら、もう少し自分を卑下せずに、ちょっとは生きてみようかなと思う気になったかと。うちはそれほど金がなかったですし、『自分が生き延びていったら金がかかるだろう』とか、自分で言っていましたから。『僕はお父さんよりは長生きはしない、お父さんよりずっと先に死ぬ』とずっと宣言をしていましたので。

(中略) そういう情報が、(中略) 当時は本当に僕は分からなくて…。」(FGI-3: M さん 妻を焼身で亡くし、その後、自責感から息子も自死で亡くした夫)

【親の自殺現場を見てしまった我が子の症状や体調、心理について相談できる場所】についての語りの例: 「やっぱり子供に見せてしまったという、『親としてなんとかできへなかったやろか』って思いはずっと今でもありますね。検視の間も、(現場に居合わせた小学校高学年の) 次男は結構気が強い方だったんで、声は出さなかったですけども、座布団の上に小さくなって涙ぼろぼろぼろぼろ……。I さん、思い出されすすり泣く)。 (中略) 次男の方がなかなか学校行けない時があって。自分でもどうしてやったらいいのか分からなくて、学校にも何度も足運びましたし、『子供がこういう状態で学校行けません』と。そういう時にやっぱり一番欲しい情報っていうのは、子供の心理について、専門家の意見が欲しいということなんですけど、どこに行ったらそれが聞けるのかっていうのがまだ分からないんですよね、その時にね。学校の方、問い合わせても明快な答えは得られないし。」(FGI-2: I さん 妻を縊首で亡くした夫)

【小さかった子どもへ親の自殺について伝達する時期や方法】についての語りの例: 「子どもが11カ月で、親が死んだことも分かってないし、言えなかったんで、子どもが、いろいろ小学校入学、中学校、高校、大学、入る時でも、(中略) 節目節目で言おうと思ったけど、全然言えなくて…。言ったのが大学院出て、就職決まった後で、やっと、(中略) 言いました。」(FGI-3: K さん 夫を列車飛び込みで亡くした妻)

【労災申請の方法】についての語りの例: 「極端なこと言いますと、(中略) 『え?』っていう。(中略) 『労災って言葉って、意味、何?』って。(中略) まず、そこからなんですよ、細かいこと言いますと。」(FGI-2: E さん 夫を縊首で亡くした妻)

【職場での勤務状況や事実】についての語りの例: 「でもやっぱり、主人の死んだ原因がなかなか明らかにできないもので、ほんとに思い悩みました。でもやっぱり息子2人が、(中略) 子供から見たら父親ですわね、父親がどう生きてどう死んでいったかというのは、妻である私が説明責任があると。」(FGI-2: F さん 夫を飛び降りて亡くした妻)

【多重債務後の自己破産と生活再建の方法】についての語りの例: 「もう(夫のお葬式の) 後は、私の地獄でしたね。(自営業の会社に勤めていた) 主人が亡くなって、仕事、会社は倒産しないとイケないし、(中略)、(夫が決行する直前に妻のGさんがやっとのことで辿り着いた司法書士の) 先生が、『もう、僕がしてあげるから。手続きをしてあげるから。』って言うってくれたんで、ほんとに私はなんにも後のことは分からなかったんで、『もう、先生、お願いします。』って。(先生の指導の下、自己破産で売ることになった) 家のことも、それから後、全部会社の倒産と自己破産と、全部私がしたんですけど…。」(FGI-2: G さん 夫を練炭で亡くした妻)

【請求に従って支払う必要があるのか、減額を求めても良いのか、或いは支払わなくても良いものなのか】についての語りの例: 「賃貸物件で亡くなった貸し物件ね。あれでね、払わなくていいリフォーム代を請求されてる人とかある。それをね、もう早く片付けたいから払っちゃってるんですよ、何百万ていうの。もうそれはね、不当利得だと私は思う。だからその、とりあえず請求書が来たら払わなあかんのか払わんでいいのかっていうものをちゃんと見てあげてほしい。」(FGI-1: C さん 夫を縊首で亡くした妻)

【子どももおらず複雑ではなかったので死別後の手続きでは困らなかった】についての語りの例: 「僕は若かったんで(中略)。子どももいなかったですし、二人の保険もなかったし、二

人の家もなかったんで、(中略)手続き的にそんなに複雑なものはないんですよ。っていうのは遺産とかないし、市役所の窓口で『次はこれです、次はこれです』みたいな案内をしてもらったから手続きで困った印象はないんです。複雑じゃなかったからかもしれないですけど。」(FGI-1: Aさん 妻を飛降りて亡くした夫)

「あんまり一般化できないと思うんですけど、やっぱり僕の場合というか、男っていう部分もあるかもしれないですけども、まあその意味で言えばほとんど支援は、支援っていうか情報も要らなかったし、支援も要らなかったっていうのが現状なんですね。」(FGI-1: Bさん 妻を縊首で亡くした夫)

### 3-3-(d). 情報提供の方法についての比較の結果

望まれた情報提供の方法については、(1)【リーフレットや冊子による提供】、(2)【先に同じ経験をした遺族などが一緒に動いて支え橋渡しする】、(3)【既存の専門家からの自死遺族の苦しさに配慮した手厚い対応】の3つが全てのグループで共通していた。(2)については、逆に、【家庭訪問への抵抗感】がFGI-1の妻を亡くした夫とFGI-2の夫を亡くした妻から挙げられた。

(1)【リーフレットや冊子による提供】についての語りの例:「やっぱり、そういう一覧表みたいなね、『こんな困った時は、ここへ相談窓口ありますよ』っていうものを、入れ替えにね、死亡届(の窓口)に行った(時に)。あれはみんな行かなあかんのやから、その時にそういうものを頂けたら。その時はそんな気分になれなくても、ちょっと気持ちが落ち着いたところに、『あ、なんかもらったなあ』思って、目にするかも分からないんでね。」(FGI-2: Fさん 夫を飛降りて亡くした妻)

(2)【先に同じ経験をした遺族などが一緒に動いて支え橋渡しする】についての語りの例:「遺族になった直後に抱えてる問題すべてを洗い出して、直後にすぐ起こる問題と、長いこと経って起こる問題があるわけ。突然知らないことが起こってくるから、そのコーディネーターの人は全部を知ってる。(中略)もし鉄道(自殺)だったら1週間後(～1ヶ月後など)に(損害賠償請求が)来ますとかね。そのときは即、弁護士をつなげますとか。それから生命保険は何カ月までに(請求手続きを)しないといけません。厚生年金とか会社のあれも全部しないとイケないっていうことを全部その人は知ってなあかんわけ。遺族が抱えてる問題。それで、だからもう(コーディネーターの人は)即、行くの。」(FGI-1: Dさん 夫を縊首で亡くした妻)

「自分が一番しんどい時に支え励ましてくれたそういう人たちに感謝する思いが、今、新しい相談者を、逆に相談を聞く立場として、自分の経験が生かされたらいいなと。どうしたらこういう過労死問題、また過労自殺問題を防げるかなっていうことで、そういった活動を今しております。(中略)こういう被災者を作ったらいけないという思いを、遺族が言っていかなあかんという気がしてます。(中略)圧倒的に泣き寝入りして逝かかった人(逝かれた人-引用者補注)、証拠が出せずに敗訴した人、認められ…(涙に声を詰まらせられる)、事実があってもね、ほんとに悔しい思いで逝かかった人たち、声を上げられない人たち…。私は(夫の過労自殺が労働災害として)認定され裁判でも勝ち、そうした立場の者

が、声を上げられない人の分までね、『頑張っていかなあかん』っていう、使命感を持っています。」(FGI-2: Fさん 夫を飛降りて亡くした妻)

「具体的な、その人が抱えている困難を見つけてくれる、(必要な人や機関に)橋渡しをできる人がもっと増えるといいかなということ。」(FGI-3: Mさん 妻を焼身で亡くし、その後、自責感から息子も自死で亡くした夫)

「今から考えると先輩遺族が良いと思うけど、きちっとしたちゃんと理解してくれる保健師さんであればオッケーだし、カウンセラーでもオッケーだろうし、ソーシャルワーカーみたいな人でも良いし。」(FGI-1: Cさん 夫を縊首で亡くした妻)

「だからそこから先はやっぱり個人なんですよ。個人が一生懸命その分野やってるかどうかな、一生懸命考えてるかどうかなと思うんで。」(FGI-1: Bさん 妻を縊首で亡くした夫)

- (3)【既存の専門家からの自死遺族の苦しさに配慮した手厚い対応】についての語りの例:「警察(署)の中で遺体を引き取る段階で葬儀社を決めないといけないんで、その余裕がないんですよ、精神的に。亡くなって(遺体を)見てすぐに葬儀社、遺体を運ぶ関係で『決めてください!』って警察の方からバーって言われたら、『どこに?』っていうのか…。とりあえず、ちゃんと家に連れて帰りたい!ただもう、それだけですから…。(中略)聞いたんですよ、警察に。(中略)『こうこうありますから(中略)できない。』って言われたんですけど。それだったら、パンフレットなり何社から預かるとか、何かもうちょっと親身になってその部分を…。家族がいっぱいいっぱいになってる時にするんだから…。余裕が欲しい…と思いますね。何かもっとこう…。警察の対応が、やっぱり欲しいなと思いますね…。」(FGI-2: Gさん 夫を練炭で亡くした妻)

「私が遅う、19時ごろ帰ってきた時に、もう(家の中が)真っ暗やし、(妻に)携帯(電話で連絡)を先しても全然取らへんし、『おかしいなあ』思って。行ったら、自宅のクローゼットで首つってたんですよ。(中略)私は、もう、すぐ119番して。んなら警察が来て。いろいろ聞かれて、ずーっと…。ほんなら早速なんか、葬式の話になってしもうて、『ご主人、泣いてるより、しっかりせなあかん!』って言われて。ほんなもん、しっかりできるはずなのに…。」(FGI-2: Hさん 妻を縊首で亡くした夫)

「例えば、役所に実際に足を運んだ場合、(中略)『どういう理由で亡くなったんですか?』って聞かれた時に、何回も何回も自殺って言葉を何回言わなきゃいけないのかって。もうそれで『(もう、相談しなくて)いいや!』って(投げ遣りになる)(後略)。たらい回しにされない。(中略)場所によっては(役所の職員の誰かが同伴して)付いて行ってもらえる。」(FGI-2: Eさん 夫を縊首で亡くした妻)

「私も子どもが小さいけど、どこか働きに行きたいけど、今小さすぎて行かれへんで、生活保護を受けるかなと思って区役所行ったけど、(中略)もう二度と来るものかと思って、(中略)怒って帰ってきたことは…。(中略)なんや冷たかったよ…。」(FGI-3: Kさん 夫を列車飛込みで亡くした妻)

「役場でも死亡原因が分かる訳ですし、家族構成も分かる訳ですし。『子供さんが、いはったら(おられたら-引用者補注)こういうことがあるんで、そういう時は困った時はどこに行って』というのがあったら、また全然違ってくると思うんですけどね。」(FGI-2: Iさん 妻を縊首で亡くした夫)

- 【家庭訪問への抵抗感】についての語りの例:「例えば、(中略)隠してるケースってある訳で

すね、よく、（家族を自殺で亡くしたと）知られたくない。そこに対してこう、『（私も）遺族です。』って言って訪問すると、やはり辛い。（訪問された側からすれば、）『何してんの？』みたいな話になることもあるわけですよ。だから、そこはすごく難しい訳で…。例えば僕なんか、そんなんいきなりやって来られても、『何？』っていう、『あんた、何しに来たの？』みたいな、多分そういう態度。戸を開けないというか、『あんた、何様？』みたいな感じで思うと思うんですね。訳の分からん。それが、信頼関係のある人だったら別ですよ。いきなり初対面で家に来られて、『私が何とかしてあげる』って、どっかの宗教かみたいな気になりますよ。』（FGI-1：Bさん 妻を縊首で亡くした夫）

「ご近所の方は特に知ってますよね、うち（の場合）なんかも皆さんご存じなんで『なんかあったんや』と、こういう目があるんですよ。（中略）（訪問される側の遺族の）皆さんが納得してればいいんですけど、一人でもその（訪問してくれる）人が来ることによって、『うちの家族が自死遺族って、みんなに知れてしまう』ってなると、その時は（訪問してくれる人の話を）ニコニコして聞いても、あとで家族の中でもめたりとか…。」（FGI-2：Eさん 夫を縊首で亡くした妻）

## 4. 考 察

### 4-1. 情報提供について望まれた（a）時期・（b）実施者・（c）情報・（d）方法についての考察

#### 4-1-(a). 情報提供の時期についての考察

望まれた情報提供の時期については、遺族が自殺で配偶者を亡くしたことをなかなか口外できない中、(1)【自殺と判明した直後から随時】に、(2)【既存の専門家が遺族の対応をした時】が、「自死遺族への情報提供を実施する絶好機となる」ことを強く認識し、その好機を逃さない対応が望まれる。

また、(3)【遺族が必要と感じて聞いた時に出来るだけその場で】についても留意が必要である。なぜなら、遺族は「この人なら」と聞く相手を注意深く選んだ末、意を決して聞いていることが多いことが推察されるからである。川野（2009：25）が研究報告書の中で、「長崎県自殺対策専門委員会」において当時決定された方針を引用し紹介しているが、その方針とは「早期対応の中心的役割を果たす人材（ゲートキーパー）を養成したり、中心的役割を果たす相談機関を設置するのではなく、『関連する様々な機関や地域において、ハイリスク者やその周囲の人々が、必要と感じた時に、タイムリーに利用できる有用な情報が提供される体制を整備すること』」というものである。ここでも「必要と感じた時に、タイムリーに」と表現されており、先行の報告ともほぼ一致する。

#### 4-1-(b). 情報提供の実施者についての考察

望まれた情報提供の実施者については、(2)【警察】の語りの例を見ても分かるように、グループによって言及のされ方が一様ではなく、まとめ作業には注意を要した。しかし、共通するのは、「遺族の益となるために動いてほしい」という遺族の思いであった。

遺された配偶者の場合、死別後のあらゆる手続きの負担がのし掛かる現状があるにもかかわらず、今回、特に挙げられた(2)【警察】や(3)【行政窓口】の担当者は自死遺族の対応をする機会が多い立場にありながら、これまで支援の担い手としてほとんど着目されてこなかった。しかし、既遂自殺の際に現場や病院に駆けつける警察は、死因が確実に自殺であると判断される場合には、その場でパンフレットなどの冊子を手渡すと同時に、目の前の遺族の癒しや予想される困難の解決に繋がる声掛けを実施することのできる最初の専門家になり得る。また、遺族が必ず訪れることになる行政窓口の担当者は、目の前の業務だけでなく、自死遺族の背景や子の有無などを考慮し、期限のある手続きや労災申請の方法、多重債務の処理方法、鉄道会社や賃貸物件の業者から損害賠償請求をされる可能性がある場合にはその対応方法の他、未成年の子や就学中の子がいる場合には遺児の交流の場や奨学金の情報など、個別の状況に応じた情報提供が望まれる。

さらに、(1)【先に同じ経験をした遺族など】による情報提供が望まれた背景として、先に同じ経験をした遺族が、遺族の特有の気持ちと手続き全般を既に理解していることが挙げられる。そのため、先に同じ経験をした遺族は、後から遺族となる者の気持ちに共感をもって寄り添ったり、後から遺族となる者が見落としがちな手続きを予測し何が必要なのか情報や支援となるかについての個別の見立てと同行支援を実施したりする上で、最適な人材の一人になり得る。

FGI-1 と FGI-2 において【葬儀社】からの情報提供が挙げられた。しかし、FGI-1 と FGI-2 に特徴的な語りであるとは言えない。葬儀社については、FGI-1 においては家族に対する気遣いの万全さを、FGI-2 においては死別後の手続きに関する情報提供があったことをそれぞれ評価する声が挙げられた。事実、葬儀社による自死遺族支援の留意点について言及した鷹見(2010 a; 2010 b)の報告は、実にきめ細やかに心配りがなされており一読の価値がある。このように、葬儀社は死別後支援の専門家であり、個別の状況に応じたさりげない情報提供を実施できる専門家として期待される。

FGI-1 と FGI-2 の双方において【弁護士】、【司法書士】が挙げられた。しかし、いずれも、FGI-1 と FGI-2 に特徴的な語りであるとは言えない。3つのグループ全てに夫を過労自殺で亡くした妻が対象者として参加したが、特に FGI-3 では未成年の子に関する情報提供や支援に話題が集中しがちであった。FGI-1 では相続の問題の他、鉄道会

社や賃貸物件の業者から賠償請求された時などに弁護士や司法書士などが助言をすることが求められた。また、FGI-1 と FGI-2 では過労自殺の後で弁護士が必要となることが強調された。さらに、FGI-2 では多重債務の処理と自己破産について司法書士の貢献が大きかったことが指摘された。

FGI-2 において【会社の社長と上司】が、FGI-3 において【職場・労働組合の人】がそれぞれ挙げられた。会社の社長と上司については、過労自殺後の職場での勤務状況や事実に関する情報提供を実施する者として言及された。また、職場・労働組合の人については、実際に公務上における過労自殺の後の公務災害の申請について、お通夜の日に職場・労働組合の人から情報提供を受け、その後も弁護士との相談と一緒に動いてくれたことが良かったという評価として語られた。

また、FGI-2 において【学校の先生】が、FGI-3 において【学校の先生や養護教諭】がそれぞれ挙げられた。FGI-2 においては中学生と小学生の子がいた I さんから、FGI-3 においては小学生や小学校入学前の子がいた J さん・L さん・M さんからそれぞれ挙げられたことが特徴的であった。具体的には、学校の先生や養護教諭は、遺された配偶者が自死の事実を学校に伝えに行った時、或いは、遺された配偶者が我が子に対し子どもなりになかなか成長発達ができなかったと思われる時、さらには、親の自殺現場を目撃した我が子が学校になかなか行けなくなってすごく困って先生に聞いた時などに、自死や境界例などの精神的な病についての見識や子どもへの心理的影響、子育てに関する情報、あしなが育英会などの子どもの集まりと経済的な支援に関する情報、クラスでどう受けとめるか、保健室の先生が訪問してくれることなどについて、学校でしっかりとした情報をつかんでおくと同時に、学校での統一した対応を決めておき、児童・生徒の家族から聞かれた時に戸惑ったり分からないと返答したりすることなく、明快にその場で情報提供することが望まれた。

FGI-1 において唯一【保健師】・【ソーシャルワーカー】が挙げられた。この背景として、2つの要因が考えられる。第1に、本研究の3つのグループにおける対象者間で保健師やソーシャルワーカーに対する認知度に差があり、FGI-1 の対象者がこれらの専門家に対する認知度が高かった可能性があることが挙げられる。第2に、仮にこれらの語りが FGI-1 のグループに関連があると考えた場合、これらの語りについて積極的に議論をしたのが夫を亡くした妻であったことから、特に子がいな家庭において夫を亡くした妻が独り遺されるだけでなく、夫の一番そばにいながら夫を守れなかった妻としてその責めを一身に受ける立場となることが多いことが挙げられる。そのため、自殺発生直後から葬儀後までの時期に、保健師については家庭訪問を実施できる専門家として言及され、ソーシャルワーカーについては既存の精神保健福祉士などのソーシャルワーカーとは別に、自死遺族に特化した自殺専門のソーシャルワーカーが関わってほしい、と

いう形で言及された。

また、FGI-2において唯一【宗教関係者】が挙げられた。しかし、本研究だけでは FGI-2 のみに特徴的な語りであるとは断定できない。宗教関係者に望むこととして、初七日や四十九日法要などの際に、自殺した人はあの世では身分が低いという俗説があるが本当かどうかなどといった故人のあの世でのことや、納骨をしなければならないのか、いつまでに納骨をする必要があるのか、などといった遺族の疑問に答えてほしいという要望の他、難しいお経の話ばかりでなく仏教の話を今の生活に結び付けて話し、心の慰めやどう生きるかといった話をしてほしい、などの要望が挙げられた。さらに、日頃から懇意にしている菩提寺や神社があることが、葬儀社の選定時以降の僧侶や宮司との関わりを円満にし、情報提供や助けを得やすくする可能性があることが示唆される。仏教の僧侶による終末期医療や遺族支援の現状や僧侶自身の意識について調査した森田ら(2007: 37-40)は、僧侶らが「今までの学びだけでは、目の前にいる遺族をサポートすることができない」と感じていることを指摘した。また、今後の課題として、「遺族側が宗教者に対して何をどの程度求めているのかを明らかにすることも必要である」と記している。そのため、本研究は、まさに、自死遺族が仏教の僧侶や神道の宮司に対して何を求めているかについて一つの示唆を提示するものになり得ると考える。ただし、本研究においては、仏教と神道についての語りは得られたが、その他の宗教を信仰する対象者からの語りは得られなかった。

FGI-3においては、唯一【検案・解剖担当者】が挙げられた。しかし、FGI-3のみに特徴的な語りであるとは考えにくい。この語りは夫を高所からの飛降りて亡くした妻である L さんからのみ言及された。検案・解剖担当者は、故人がどのような感じで亡くなったのか、死因は何だったのか、直接の死因は何だったのか、或いは故人の傷跡などについて、遺族に直接会った上で遺族の腑に落ちる説明を実施することにより、遺族が死に対して抱く疑問を納得感に変えることが出来る専門家になり得る。

#### 4-1-(c). 提供してほしい情報についての考察

遺族が提供してほしいと望んだ情報については、まず、(1)【死別後の期限のある手続きなど必ず必要になる最低限の情報】が求められた。死亡届、医療保険、銀行名義変更・口座凍結の解除、遺族年金、住宅ローン、遺産分割など死別後にしなければならない手続きは多岐に渡る。死別後の諸手続きを誰がしたかについて、対象者 13 名のうち 11 名が「自分がした」と答えているように、遺された配偶者は死別後のあらゆる負担を一手に引き受けることになる。そのため、関係者は、死別後に最低限必要となる手続きなどに関する情報を提供することはもとより、個別の手続きの進捗状況に心を配り、まだ済んでいなかったり忘れていたりする手続きに対する積極的でさりげない助言や指導を

実施することが望まれた。特に、生命保険や、過労自殺と思われる時の【労災申請の方法】など、期限のある手続きをし忘れていないかをさりげない声掛けで確認することが求められた。

また、(2)【明日から生きていくための具体的な情報（衣食住や生活基盤を成り立たせるための情報など）】が挙げられた。死別直後の「天と地がひっくり返ったような状態」(Cさん)の中で、配偶者の自殺という起こってしまったことをどう受け止め、どのように考え方を変えて明日から生きていけば良いのか、さらには、配偶者の自殺に伴って失われた経済力や家屋の他、人生を共に築き上げて来た伴侶という存在などをどのように補いどう生きていけば良いのか。具体的には、夫との死別に伴い社宅から転居するための不動産情報、自宅全焼後の衣食住の確保や市営住宅への入居手続き、転居後の学校までの移動手段、生活基盤を成り立たせるための情報などである。つまり、明日から生きていくための個別具体的な考え方の提案や生活の再設計に向けた助言、さらには生活保障を目的とした各種制度に関する情報の提示が求められた。

続いて、特に当時、1歳未満の乳児、小学校入学前の子、小学生、中学生の子がいた対象者から、【子どもの心理・発達面への影響、経済的な支援の他、子ども向けの分かち合いなどの集まりに関する情報】が強く求められた。具体的な下位カテゴリーとして、次の4つが挙げられる。

まず、1)【子どもの学習上の不適応、学校での他の児童・生徒からのからかいやいじめの被害、不登校の時にどうしたら良いのか】である。事例として、夫を縊首で亡くした妻であるJさんの長男は、死別の数年後、小学校高学年の時にクラスの中で「お父さん、自殺したんか」とからかわれ、その後の中学校での不登校を余儀なくされた。このからかいの言葉の背後には、家族を自殺で亡くした級友を揶揄したりいじめの対象にしたりしてしまう小学生や中学生の年代における意識と知識の偏りや不足が垣間見える。今後、これまで我が国において蔓延し支配的であった自殺を忌避すべきとする根深い風潮を変えていくには、小学校教育から公に自殺の事実を社会的客観的情報として隠すことなく伝達し、活発に意見交換される必要があるだろう。このように、ここでは、学校において学習上の不適応や揶揄・いじめの被害、さらには不登校の状態に陥った時に、どのように対処し我が子を養育すれば良いのか。その方法に関する情報が強く望まれた。

次に、2)【子どもが生きようと思えるような遺児の集まりや経済的支援に関する情報】である。事例として、妻を焼身で亡くした夫であるMさんの小学校高学年だった長男は、自責感に苦しみ、その後、高校在学時に自死で亡くなった。Mさんはあしなが育英会などの子ども向けの分かち合いの場や奨学金などに関する情報があれば本人は生きていたのではないかと悔恨の念を述べた。親を亡くす場合に限らず、家族を自殺で亡く

した子が学校で孤立感を深めていくことは想像に難くない。ましてや、家庭内で起こる自殺の場合、故人の周囲にいた家族にとって、責める者が自分しかいないことも少なくない。Mさんの長男は、自身を責めた。家も経済的に余裕がある訳ではなかった。Mさんが「自死遺児の交流とか、集まりだとか、あるいは経済的支援のイメージがわくような情報が、もし僕自身というよりも、子ども自身にその情報が入っていたら…」と述べたように、自死遺児の集まりや奨学金、就学支援金のような情報が小学校や中学校、高校の先生などからMさんの長男自身に直接届いていたとしたら、その後の状況が違っていただ可能性がある。特に、他にも自死遺児がいることを知ることは、Mさんの長男がその輪の中で心を開き、生きようと思うきっかけを掴む機会となった可能性がある。また、進学や進級を断念する子が経済面の不足を理由とすることも少なくないことから、奨学金などの情報や申請支援が親を自殺で亡くした子に生きる意欲を与える大きな原動力となる可能性がある。

さらに、3)【親の自殺現場を見てしまった我が子の症状や体調、心理について相談できる場所】が挙げられる。親の自殺現場を見てしまった子は、母親の縊首現場に父親であるIさんと共に居合わせた小学校高学年の次男と、母親の焼身後に全焼した自宅に帰宅したMさんの小学校高学年の長男であった。Iさんは、我が子に母親の自殺現場を見せてしまったことを強く悔やみ、子どものことを最もよく知ってくれている小学校の先生に助けを求めたが、すぐには必要な情報が得られず苦しんだ。Mさんは、長男が苦しみながらも進学した中学校に通うことが出来ず、学校に相談に行ったが、当初は「学校に来ないと何も対応しない」と突き放され苦しんだ。Iさんは、母親の自殺現場を目撃した息子が学校になかなか行けなくなってきてすごく困っている中、学校の先生から、どこに行ったら子どもの症状や心理について専門家の意見が聞けるかについての情報を求めた。さらに、子どものことは学校でしか聞けないと思って聞いているので、「いや、ちょっと」と間を置くのではなく、明快に即答してもらえたらすごく安心感があり助かる、と指摘した。Mさんも、子どもの母親が自死で亡くなりましたと学校に伝えに行った時に担任の先生から「きょとん」とされたことに触れ、自死や境界例などの精神的な病についての見識や子どもへの心理的影響、子育てに関する情報、あしなが育英会などの子どもの集まりと経済的な支援に関する情報、クラスでどう受けとめるか、保健室の先生が訪問してくれることなどについて、学校できちんとした情報を掴んでおくことと同時に、学校での統一した対応を決めておき、児童・生徒の家族から聞かれた時に戸惑ったり分からないと返答したりすることなく情報を提供してほしいと強く望んだ。

上記に関連し、逆に第一発見者が子どもではなく、遺された配偶者であった例についても触れておきたい。ここでは実例として、自宅で縊首により夫を亡くした妻であるE

さんの場合を取り上げたい。Eさんは、夫の自殺現場を発見し夫の遺体を抱きしめたことに当初はフラッシュバックで当時のことが思い出され苦しんだ。しかし、Eさんは、発見したのが我が子ではなく親である自分で良かったと振り返った。また、他の遺族からの一言により、現場で夫を抱きしめたことを愛おしく思えるようになったと述懐した。

「夫を発見した時の衝撃っていうのはとても大きかったんですけども。娘、息子がその場面を発見したら、どうだったろうと思うと背筋が凍るんですね。『私でよかった』と。私よりはるかに長い年数を娘や息子は生きていかなきゃいけないですから、その衝撃的な場面を見せるってことはとてもあの子たちに、どんなにつらいことだったろうと思うと、それは私でよかったと思ったんですが、それもそういうふうな言葉を言ってくれた遺族の方がいたんですね。(ある遺族の方に、)『もうね、この手に残ってるの』って言ったんですね、抱きしめた時の夫のね、冷たくなった…。あれ夏だったもんですから、半そで着てたもんで、こう、抱きしめた時に残ってるんですね、冷たさが…。でも、『Eさんで良かったんじゃない?』って、その(遺族の)方が。その方は、お母様が(中略)(鉄道会社の列車にひかれて-引用者補注)亡くなられたもんですから近づけなかった。みんなが誰も見れない。(中略)『ご主人をそうやって、あなた抱きしめてあげられて良かったじゃない』って。(中略)『ああ、私で良かったんだ』と。そしたら、抱きしめたことさえ今度は逆に愛おしくなって、それから本当に少し楽になったんです。」(FGI-2: Eさん 夫を縊首で亡くした妻)

Eさんの子は2人とも30代前半であった。30代前半の成人した子を持つEさんですら、もし子が発見していたらと思うと「背筋が凍る」と表現した。だとすれば、現場を発見したのが未成年、特に、本研究においては小学校高学年であった場合には、IさんやMさんのように親の動揺が大きくなるのはむしろ当然のことである。親の自殺現場に居合わせた小学生の子が受ける衝撃は相当に大きなものである。このことから、小学校高学年、或いは可能性としてはその前後の年代の子がいる家庭で、自殺で配偶者を亡くし遺された配偶者は、自分のことよりも自殺現場を見てしまった我が子の症状や体調、心理について相談できる専門家や場所に関する情報を強く求めていると言える。

最後に、4)【小さかった子どもへ親の自殺について伝達する時期や方法】が挙げられる。これは、FGI-3のみで挙げられたことが特徴的であった。子がいる家庭で遺された配偶者が子にどのように説明をするべきかに悩む実態については、既に小山(2006)が指摘している。FGI-3では、小学校高学年の長女と小学校入学前だった長男がいた妻であるJさんと、1歳未満の乳児を抱えていた妻であるKさんから語られ、小学校低学年の2人の男の子がいた妻であるLさんも強い賛意を示した。一方、Mさんは、自宅全焼であったため、小学校高学年の長男は父親から伝え聞く前に目の当たりにすることになった。また、FGI-2のIさんの小学校高学年の次男も、母親の自殺現場を目の当た

りにしていた。この時、Iさんは、現場を見ていない中学生の長男が他の人からあやふやな説明を受けたり自分を責めたりすることがないよう、父親である自分が直接事実を伝える必要があると考えていた。他方、大学生の長男と中学生の次男がいた妻であるFさんの場合は、夫が救急病院に搬送されたため、子どもたちは救急病院で父親の死の事実を知ることになった。

つまり、親の自殺現場を見てしまった子の場合とは逆に、親の自殺現場を見てもいないし自殺の事実を伝え聞いてもいない子に対し、遺された親は、いつ、どのようにその事実を伝えたら良いのか、という遺された親にとっての苦悩が語られた。

FGI-3の夫を縊首で亡くした妻のJさんは、当時、小学校入学前だった長男には、小学校高学年になってから事実を伝えた。また、夫を列車への飛込みで亡くした妻であるKさんは、1歳未満の乳児であった長男には、大学院を卒業し就職が決まった20代前半でようやく伝えた。しかし、夫を飛降りて亡くした妻であるLさんは、小学校低学年だった2人の男の子には、3年が経過した現在も夫の死の事実を伝えていない。

もちろん、可能性として、現実的にはこのような親の苦悩をよそに、子は本人の望む望まざるにかかわらず、死別からの時間が経過する日々の中で、既に親類や同じ学区の友達、友達の親の他、新聞やインターネットなどの各種情報媒体などから、直接的・間接的に親の自殺に関する情報を見聞きしている可能性はある。とは言え、子にとって、遺された親がいる場合には、遺された親が自ら語りかけてくるその言葉が最も信頼に足るものであり、また、影響力のあるものになることであろう。このように、遺された親は、ここでは乳児から中学生までの我が子に対し、既に亡くなった親が自殺で亡くなったという事実を、いつ、どのように伝えたら良いのかに苦慮しながら、その答えに関する情報を欲した。

以上、【子どもの心理・発達面への影響、経済的な支援の他、子ども向けの分かち合いなどの集まりに関する情報】の4つの下位カテゴリーを考察した。

続いて、続柄や子の有無による特徴というよりも、故人と遺族の背景による特徴として、過労自殺ではないかと思われる場合には【労災申請の方法】や【職場での勤務状況や事実】が情報として強く求められた。本研究においては、過労自殺ではないかと思われる例は、Cさん、Eさん、Fさん、Jさん、Lさんの5名であり、全員、夫を亡くした妻であった。さらに、夫を自営業における多重債務が主な原因で亡くした妻であるGさんの場合も、夫が心労と共に働き詰めであったことを考えれば、原因の一つとして過労も挙げられることであろう。特にFさんは、「主人の死んだ原因がなかなか明らかにできないもので、ほんとに思い悩みました。」と当時の苦しかった気持ちを吐露し、「でもやっぱり（中略）（子どもたちに対して）父親がどう生きてどう死んでいったかっていうのは、妻である私が説明責任があると。」と強い決意を述べられた。職場で自殺

者が出た場合、社長や理事長などの経営責任者や上司などは、訴訟を恐れるあまりに組織と地位の保身に走るのではなく、雇用されていた者の家族のこのような思いを真摯に受け止め、職場での勤務状況や事実などの真実の情報をありのままに提供することが強く求められる。

また、経営上の負債や個人的な借り入れによる多重債務状態に陥っていたのではないかと推察される場合には【多重債務後の自己破産と生活再建の方法】が情報として強く求められた。本研究において多重債務後の窮状を訴えたのは、夫を練炭で亡くした妻である G さんのみであった。会社の倒産と自己破産の手続きについては、夫が亡くなる直前に会うことができた司法書士が全面的に請け負ってくれた。しかし、G さんが「もう（夫の葬式の）後は、私の地獄でしたね…。」と語ったように、G さんは夫と死別する数年前に、がんの手術をし休職を余儀なくされ、現在はリウマチがひどくなっており、就労がままならない状況が続いている。しかも、夫の死後、遺族年金の受給手続きに出向いたところ、夫の年金保険料の納付期間が1年不足しており、それに対し G さんが「1年払いますので、なんとかありませんか？」と尋ねたところ、年金窓口の担当者は、「（本人である夫が既に亡くなっていることから、）いや、もう、無理です。」と返答し、G さんを困惑させた。さらに、生活福祉資金などの借り入れについても、家族が連帯保証人になることを強く反対しており、G さんは「もう、必死で生活してきましたから…。」と声を震わせた。もちろん、この場合、会社経営における多重の借り入れ状態について、当事者が自ら招いた自業自得の状態だと見る向きもあるだろう。しかし、G さんのように、多重の借り入れ状態に陥りながらも必死に夫を支えようと奮闘し、その挙げ句に夫が練炭で急逝した上、そこに自身の体調の不調も輪をかけたまま現在もギリギリの生活を余儀なくされている事例もある。遺族対応をする関係者には、自らが担当する業務だけでなく、遺族の背景にも洞察の目を向け、その遺族が多重債務の状態に陥っていると推察される場合には、遺族に多重債務後の自己破産や生活再建に役立つ制度を紹介し、その利用を仲介することが求められる。

さらに、自殺手段が列車飛込みの場合や賃貸物件における自殺などの場合、鉄道会社や賃貸物件の業者から賠償請求されることがあり、そのような場合に遺族が請求された金額をそのまま払ってしまっていることも多いとの指摘が出た。特に、問題として、この時に C さんが言うように、「払わなくていいリフォーム代を請求されてる人」がおり、それは「不当利得だと私は思う。」との指摘が出た。そのため、このような過分に賠償金を請求しようとする行為を未然に防止するために、特に弁護士や司法書士は遺族の側に立ち、【請求に従って支払う必要があるのか、減額を求めても良いのか、或いは支払わなくても良いものなのか】を見て判断してほしい、との要望が強く出された。

最後に、FGI-1 では、当時、子がいなかった家庭で妻を亡くした夫から【子どももお

らず複雑ではなかったので死別後の手続きでは困らなかった】が挙げられた。Bさんが、「男っていう部分もあるかもしれないですけども」と述べたように、女性と比べ、比較的対外的な対応に長けた男性だったからということも関係しているかもしれない。しかし、やはり、決定的な要素は、「子の有無」と「子が成人か未成年か」という点であった。ただし、本研究では、当時、高校生の子がいた対象者が含まれていないため、本考察では最大限の注意を払いながら記述を進めている。当時、中学生の長男と小学校高学年の次男がいた夫であるIさんと小学校高学年の長男がいた夫であるMさんは、子に役立つ情報の提供を強く望んだ。既に記した通り、特に、Iさんの次男とMさんの長男は、母親の自殺現場を目撃したため、遺された親であるIさんとMさんの動揺は甚大であった。他方、既に成人し、30代前半だった長男がいた夫であるHさんは、妻の自宅での縊首を発見し、直後に駆けつけた警察と葬儀社のまくし立てるような事務的な対応に心底難儀されている。しかし、同じFGI-2のグループであったIさんが子への情報提供を強く望まれたことに対し、Hさんは共感を示しつつも明確な賛意は示されなかった。つまり、妻を亡くした夫にとって、本研究においては、子が中学生か小学生の場合には遺された子に有用な情報が強く求められたのに対し、子がない場合には、遺された夫は比較的、自ら必要な手続きをこなし、時間をかけて遺族会などの自助グループに繋がっていつている様子がうかがえる。

#### 4-1-(d). 情報提供の方法についての考察

遺族が望んだ情報提供の方法については、まず、(1)【リーフレットや冊子による提供】が望まれた。FGI-1では、遺族が行政の各種窓口に行った時や葬儀の際に、薄めの冊子ぐらいのパンフレットを予め置いておいてもらう、或いは配布してもらうことが望まれた。同様に、FGI-2でも、死亡届を提出しに行った時に、死別後に忘れずにしなければならない手続きや期限までにしなければならない手続き、労災申請・遺族年金・公的な借入れ・口座凍結解除・世間一般でない問題の相談窓口などを明記した一覧を死亡届と引き換えに渡してもらい、「手続きを忘れていませんか?」、「代理でここまで出来ますよ」、「この日までに絶対しなきゃいけないから気を付けてください」と窓口担当者が口頭で確認し手助けすると共に、死亡原因と家族構成を見て「子どもさんがいると、こういうことがあるかもしれないので、そういう時はどこに行って」と教えて欲しい、との要望が挙げられた。また、葬儀担当者から死別後の手続きに関する情報が記された書類を渡されたことが評価された。さらに、FGI-3では、故人の遺体が警察に搬送され、遺族が警察に行った時に、自殺ということが確実に分かっているところで、警察の担当者から、死別後の手続きや順序に関する情報について記載されたプリントの1枚でもあれば、その場ではすぐに開けられない資料でも、落ち着いた時に読んで、「ああ、

これをしておかなければいけないんだ」と分かって助かったと思う、との要望が挙げられた。つまり、いずれのグループにおいても、関係者からのリーフレットや冊子による遺族への有用な情報の提供が望まれた。

また、(2)【先に同じ経験をした遺族などが一緒に動いて支え橋渡しする】が挙げられた。FGI-1では、特に夫を亡くした妻から活発にその必要性が提起された。具体的には、一律には無理だが自殺と判明した直後から葬儀後までの間に、全ての遺族の気持ちと手続きの流れをよく知る先輩遺族と遺族コーディネーターが、生命保険や住宅ローン、口座の名義変更、亡くなった夫の家族との付き合い方、遺産分割などの相続、過労自殺や労災の解決法、手続きの優先順位、どう受け止めどう発想の転換をしてどう生きていくかなどについて、特に遺族が遺族会や窓口で足を運ぶ元気もなかったりパソコンで情報を得ることもできなかったりする場合には電話連絡でも良いが可能な場合には直接家庭訪問し、手紙やリーフレットをポストに入れたり、食べていないようであれば食品などの差し入れを再度持参したり、「何かお手伝いすることありますか」などと声掛けするなどし、心配していることを伝えて欲しい、との提起が挙げられた。遺族コーディネーターは、臓器移植コーディネーターのような存在で、先輩遺族が担うことが出来ればもっと良いが、専門職が担うとすれば情報提供の実施者の語りの例の欄でも触れたように、自死遺族支援専門の教育を受けた保健師かソーシャルワーカーが望まれた。また、訪問先の遺族が女性の場合には、同性の気持ちがよく分かる経験豊かな年配の女性が望まれた。

続いて、FGI-2では、特に、過労自殺の場合における実際の取り組みとして語られた。具体的には、同じ経験をした遺族から相談があった時に、先に同じ経験をした遺族が運営する会が、弁護士を依頼するためにはどうしたら良いのかなどについて、会の知っている範囲の情報を提供すると共に、必要な場合には特定の弁護士事務所を紹介するなどしている、との語りであった。

さらに、FGI-3でも、自殺発生直後に、先に経験した遺族や地域で役割を担える人が一緒に橋渡しをする人として動き、社宅から転居するための不動産情報や自宅全焼後の衣食住の確保、市営住宅への入居手続き、転居後の学校までの移動手段、生活基盤を成り立たせるための情報などについて、遺族が抱く「あまり自殺のことを前面に出したくない」という気持ちに充分に配慮と注意を払いながら、その人や家庭が抱えている困難を見つけ具体的な制度や施策と一緒に橋渡しをしてくれる人がほしい、と述べられた。このように、先に同じ経験をした遺族の他、十分な研修を受け個人的にも自死遺族支援に熱意のある保健師やソーシャルワーカーなどの専門家が、自殺と判明した直後から支援を開始し、遺族に必要と思われる支援の見立てをし、その後も継続的に遺族を支え、同行支援や代行支援を実施することが望まれた。

しかし、その反面、【家庭訪問への抵抗感】が FGI-1 の妻を亡くした夫と FGI-2 の夫を亡くした妻から挙げられた。FGI-1 では妻を亡くした夫である Bさんから、突然家庭訪問されたら怪訝に思うかもしれないという不安の声が上がった他、遺族コーディネーターなどの職種に関する提起に対し次のような反論があった。それは、行政が人手不足の中で自死遺族だけを特別扱いし、コーディネーターを新しく単独で配置してまでして社会がコストをかける必要があるのだろうか、というものであった。また、FGI-2 の夫を亡くした妻である E さんからも、近所の目がある中、自死遺族の家庭だからと訪問されるのは家族がもめる種になるから慎重にしてほしい、との指摘があった。そのため、家庭訪問を実施する際には、その実施の是非について慎重に検討する必要があるし、仮に、家庭訪問を実施する際には、当事者である遺族に予め同意を得ておくことが望ましいと言える。

上記のことに関連し特記すべきこととして、先に同じ経験をした遺族などが一緒に動いて支え橋渡しすることに言及し支持したのは、FGI-1 では夫を亡くし独り遺されることになった妻である C さんと D さん、FGI-2 では夫を職場の過労で亡くした妻である F さん、多重債務状態に苦しみ夫を亡くした妻である G さん、FGI-3 では妻を焼身で亡くし自宅を全焼で失った夫の M さんであった。特に、1 歳未満の子から小学校高学年までの子を抱えた対象者で構成された FGI-3 では、全対象者が強い賛意を示し、直後からの外部からの積極的な関わりを求めた。

逆に、家庭訪問への抵抗感に言及した FGI-1 の夫である B さんは、自分自身が男性ということもあるかもしれないが情報も支援も必要とは思わなかったと述べられた。また、FGI-2 の妻である E さんも、自身の経験に基づき家庭訪問への抵抗感に言及をされていたものの、実生活では成人した長女からの日常的な支えが得られる状況があった。このため、家庭訪問への抵抗感に言及した 2 名は、現実的にも、家庭訪問が必要であるとは感じていなかった可能性がある。

とは言え、先に同じ経験をした遺族などが一緒に動いて支え橋渡しすることを強く支持した FGI-1 の D さん自身も、現実的には、「私は多分、戸を開けなかったでしょうね。(中略)(職場の方々)が来ても、戸を開けなかったから。」と振り返り、実際に家庭訪問をされても迎え入れなかったことを思い起こされた。また、D さんは次のように、自殺に対する自分自身の中にある偏見が外部からの手助けを拒絶させたことも吐露している。「だから、誰か(の)『手助け(が)必要』とかって言っても、要りません、一切! もう一切要りません! 自分の周りにそういうもの、自分で作ってましたね…。どこか私の中にそういう『自殺・自死に対する偏見があったから言えなかったのかな』って後々になって思いますけど…。」このことから、関係者は、遺された配偶者にとって、先に同じ経験をした遺族などが一緒に動いて支え橋渡しすることは望まれているもの

の、家庭訪問を実施する際には慎重さと共に、近所から「あの家庭は、自殺で亡くなったから行政からの訪問があったんだ。」と白い眼で見られないよう細心の注意を払う必要がある。

最後に、(3)【既存の専門家からの自死遺族の苦しさに配慮した手厚い対応】が挙げられた。自殺が起こった場合、遺族は様々な苦しみに遭遇することになる。ここでは、語られた苦しきのいくつかを示し、それに対する周囲の関係者が取るべき手厚い対応について要点を記したい。

遺された配偶者が、警察による現場対応から苦痛を感じている様子が見受けられた。FGI-2のHさんは、自宅で妻の変わり果てた姿を発見し、直後に駆けつけた警察の担当者から、しばらく矢継ぎ早に細かく聴取された後、遺体を運ぶ関係で間髪容れず葬儀社を決めるようまくし立てられ困惑した。警察の担当者から葬儀社を決めるよう求められる際の余裕のなさについては、同じFGI-2のGさんも述懐し、亡くなった夫を家に連れて帰りたいし対応にもっと余裕が欲しい、と訴えた。また、Hさんも警察に対し、もう少し親身になって落ち着いてから決めるというくらいの余裕を求めた。大倉(2012)も指摘しているが、警察は犯罪性の有無や自殺に見せかけた犯罪を見分ける職務上の必要性から、特に遺された配偶者への当たりがきつくなる傾向がある。しかし、遺された配偶者は、現実的には、突然の伴侶の死を前に我を失うほどに混乱を極めたいわば最弱者である。茫然自失の状態にありながらも親族に囲まれた状態で迎えることのできる葬儀の場においてさえ、葬儀担当者からの相当に丁重な扱いを受けるのならば、直後の大混乱と悲鳴の最中に駆けつける警察であればこそ、その遺族対応は葬儀担当者の丁重さを遥かに上回って然るべきではないだろうか。

また、遺された配偶者は、行政窓口などでたらい回しにされ、何度も「配偶者を自殺で亡くした」と言わなければならないことを苦痛に感じている。この背景には、FGI-1の妻を縊首で亡くした夫であるBさんが「僕なんかはやっぱり…、一人の本当にしんどい人を助けられなかったわけですよ、身近にいて。やっぱりその思いの中…、それをやっぱり中心にやっぱり持っていて…」と吐露されたように、精神疾患などに苦しんだ妻を、夫として最も身近にしながら救えなかった思いがある他、FGI-1の夫を縊首で亡くした妻であるDさんが「一番最初に(非難が)来るのは身内から来る。『お前が殺したんだ。』、『もう出て行け。』、『(この家に)住む権利はない。』(中略)『(お通夜や)葬式に出ちゃいけない』って。」と訴えたように、特に遺された妻が夫の家族や親から非難の眼で見られることも場合によってはある。にもかかわらず、遺された配偶者は、そのような負い目や引け目を感じつつも、多くの場合、自分しか死別後の手続きに動く人がいない。

FGI-3の夫を列車飛び込みで亡くした妻であるKさんが「(自殺で亡くなったと公に言

っている場合には) 周りのサポートを得られるんだけど、うちみたいに言うてなかったら、誰(から)もいらんことは言われへんけどね、誰にも相談もできへんし、サポートもしてもらえん。やっぱり、つらい時は誰かに言わなあかんのね。(自死) 遺族でもね。」と述べたように、自殺で配偶者を亡くしたと周囲に言えず、その事実を出来るだけ隠しながら、また、誰にも相談できないままの状態です別後の手続きを進めている様子がうかがえる。にもかかわらず、Kさんが乳児を連れながらやっとの思いで役所の生活保護の窓口に出向いた際に、窓口担当者は、Kさんが「もう二度と来るものかと思って(中略) 怒って帰ってきたことは…。(中略) なんや冷たかったよ…。」と振り返ったほどの冷たい言葉を浴びせ、Kさんを落胆させた。Kさんは、「ここ(の窓口)と違いますとか、こういう場合は(ここでは) 受けられませんとか言わないで、本当に救うつもりやったら、絶対一番、基本的な窓口が一番しっかりせなあかんのですよ。」と語気を強めた。

行政窓口の担当者に求められることは、主に次の3点である。第1に、言葉にしにくい死因を遺族が最初に一度伝えたら済むように、死別後の手続きの様式や住民の個人情報の管理方法を工夫することである。第2に、FGI-2のFさんが、「『こんな困った時はここへ相談窓口ありますよ』っていうものを、入れ替えにね、死亡届行った(時に)。」と提起したように、死亡届の窓口で、自死遺族向けのリーフレットや冊子などの情報を人目につかないような封筒などに入れ死亡届と引き換えに手渡すことである。第3に、FGI-3のLさんが「あしなが育英会というのがあるというのを(中略) 社会保険から国民保険とかに切り替える時に(中略) 教えてくれたらいいじゃないですか。」と指摘したように、また、FGI-2のIさんが「役場でも死亡原因が分かる訳ですし、家族構成も分かる訳ですし。」と述べたように、保険や年金の窓口などで、死亡原因や家族構成や子の年代、故人と遺族が置かれた状況や背景などを考慮し、使える社会資源などについての声掛けや資料による助言を行うことである。

最後に、もう一つ、特記しておきたい自死遺族の苦しさがある。それは、後追い自殺願望である。後追い自殺願望が語られたのは、FGI-1のDさん、FGI-2のEさん、Gさん、FGI-3のJさんの4名であり、いずれも遺された妻であった。つまり、本研究における8名の妻のうち、その半数から後追い自殺願望が語られた。

「直後が私の場合はかなり問題ありで、結局その『なぜ』とか、『自分を責める』とかっていう、その2つが苦しくて、それと『もう、死にたい。』、『死ぬ』という気持ちで、その3つがくるくるくる自分を襲ってくる。襲ってくるというよりも(中略)、それ以外考えられなくて、それが苦しかったから、それから逃げるために、浴びるようにお酒を飲んでたんですけど。だから、そういう期間がほぼ半年間あって、体重が激減して強制的にも医者に行った状態から、さらに翌年自殺未遂をして、もう半分死んでた状態で…。」(FGI

-1: Dさん 夫を縊首で亡くした妻)

「娘がほんとにぼつりと、『お母さん、もしかして、死のうと思ってる？お父さんの所に行きたいと思ってるんじゃない？』って。(中略)その時、私は、たぶん母親としてのスイッチが入ったんだろうと思うんです。もう即座に『そんなことはしない』って『絶対しないから』って娘にも自分にも言い聞かせる気持ちで…。」(FGI-2: Eさん 夫を縊首で亡くした妻)

「(警察で)『遺体を確認してください』で(遺体)安置所に入った時に、(亡くなった夫に対して)『一緒に逝く、一緒に逝くって言ったやん、なんで…』っていう感じで、もう、どうしようもできない気持ちで…。主人の顔見たら苦しい顔じゃなかったんです、笑ってたんですね。なんかほほえむような口元で、それ見た時に、なんか安心して。私もこういう顔で死にたい、一緒に逝きたい、逝けばよかった…、逝けばよかった…。もう、すごいこう…、なんで置いてくんやって…。(中略)やっぱり娘がいなかったら、きっと一緒に逝ってたと思うし。」(FGI-2: Gさん 夫を練炭で亡くした妻)

「『(亡くなった)お父さんのところに行こう』言うたら子どもに反対されて。『絶対、嫌や!!』って言うて、子どもらがすごく言うてくれたんでね、元に引き戻されたっていうことがあるんやけども。もし、ほんまにそれがなくて(なくて-引用者補注)、一緒に(子どもたちが)乗ってくれたら、車に。一緒にほんまに(亡くなったお父さんを)追いかけてたかなっていうぐらいのことがあったんでね…、うん…。」(FGI-3: Jさん 夫を縊首で亡くした妻)

このように、周囲の家族や親族の見守りが遺族の大きな支えになっていることについては、寺岡(2012: 43)も指摘している。また、最後の FGI-3 の J さんの場合については、子どもたちが「絶対、嫌や!!」と反発しなければ、親子で無理心中となる恐れがあった。J さんが無理心中に突き進もうとしたきっかけは、夫との死別以降、張りつめて頑張り続け疲れ切っていた頃に、頼りにしていた学校の先生からの不用意な言葉に落胆したことであった。しかし、子どもたちからの明確な反対の声が、J さんを我に返らせた。同様に、FGI-2 の E さんと G さんは、成人の娘からの声掛けやその存在自体が後追い自殺を抑止した。一方、FGI-1 の D さんは、子どももなく自宅で孤立する状態が続き自殺未遂に至ったが、実の母親の涙が後追い自殺を抑止した。

つまり、多くの場合、自殺で亡くなったと言えず外部に助けを求めにくい自死遺族にとって、特にここでは遺された妻にとっては、死別後に時系列で出会うことになる各種機関の関係者から得る情報が、遺された妻自身と子の命を保つための数少ない救いの手となり得る。

#### 4-2. 総合考察

本研究では、情報提供の実施者として、救急医療の関係者への言及がなかった。しかし、黒川(2007)、高橋ら(2008)、高橋(2010)、大塚ら(2011)が指摘しているよう

に、救急医療における自死遺族支援も重要な役割を果たし得る。救急医療の関係者が情報提供の実施者として挙げられなかった理由として、対象者 13 名のうち、自殺発生直後に警察が対応した対象者が 10 名、故人が救急搬送された対象者が 3 名であったことも影響しているものと考えられる。このことは、統計上の数字は得られていないが、多くの場合、現実的には、自殺を志向する者が単独でその行動を遂行しようとすることから、家族や周囲の者による発見を決定的に遅らせている現状があることが推察される。もちろん、本研究における対象者募集の際の偶然の偏りである可能性も否定できず、断定的なことは言えない。しかし、このことは、既遂自殺後に駆けつける警察対応の重要性を一層際立たせる事実であると言えるかもしれない。

なお、本研究では最も直近で遺族になった対象者が 2007 年に死別しているが、既に自殺対策基本法が 2006 年に施行されており、2006 年以前に遺族になったか、或いはそれ以降で遺族になったかで、遺族が望む情報提供のあり方に関する語りに違いがある可能性があった。そのため、改めて、2007 年に遺族となった G さん、H さん、I さん、L さんの 4 名の語りを検討したところ、2006 年以前に遺族となった対象者の語りとの違いは見られなかった。

本研究の調査上の限界は、(1) 対象者の募集の際に、配偶者を「夫」か「妻」かのいずれかで募集しており、婚姻届を出していないいわゆる内縁関係の者や同性による夫婦関係にある者などの多様な夫婦関係についての検討が出来ていないこと、(2) 方法としてグループ・インタビュー法を採用し背景の似た対象者同士で率直で多様な討議がなされた反面、他の参加者を意識し表出されなかった発言があることが考えられ、結果に偏りが生じた恐れがあること、(3) 本研究の結果は対象者の個人的体験に限定せず広く同じ続柄を亡くした人の体験について見聞きしたことからも語られたものではあるが、対象者が 13 名と限られており、また、全ての対象者が遺族会に中心的、協力的な関わりのある者であること、さらには、グループ討議への参加の抵抗感から、遺された夫の参加が 5 名にとどまったことなどから結果に偏りが生じた可能性があり、一般化する際には十分な検討が必要であること、以上の 3 点である。そのため、現場での遺族対応においては、本研究の結果を念頭に置きながらも夫か妻かという二元的な前提に縛られることなく多様な夫婦関係と背景を想定し、臨機応変で柔軟な対応を心掛けられたい。

## 5. 結 論

配偶者の性別に着目した結論として、子の有無にかかわらず、自殺発生後に遺された妻が抱える負担の方が、遺された夫が抱える負担よりも重く、長引く傾向が見受けられた。この理由として、主に下記の 2 点が挙げられる。第 1 に、遺された妻は本来、夫の

生前には家庭の内外におけるいくつもの難局を夫と共に乗り越えてきた一番の功労者であることが多いのにもかかわらず、ひとたび夫を自殺で失った瞬間から「最も身近にしながら夫を死に追いやった妻」という責めを一身に受ける立場となる場合があり、このことが彼女たちが担う死別後の負担を一層痛切なものにする傾向があることが挙げられる。第2に、子の有無にかかわらず、夫の過労自殺後の原因究明に向けた勤務先とのやり取りや訴訟準備、並びに、夫の経済活動と多重債務後の借金の処理と生活再建など、夫が生前に抱えた困難や新たに生じた課題の事後処理を、悲嘆に苦しむ妻が一手に引き受けざるを得ない状況に瞬時に追い込まれることが挙げられる。特に、第1の点が、周囲への助けを求めにくくさせる要因の一つとなっている。

子の有無や年代に着目した概略的な結論として、子のいない妻は、自宅で長期に渡り孤立する恐れがあり、場合によっては後追い自殺の危険もある。また、未成年の子がいる妻にとって、子の学習上の不応や学校でのからかいやいじめ被害、不登校の時の対処方法、遺児の集まりや奨学金など経済的支援策、親の自殺現場を見てしまった子の症状や体調、心理、発達について相談できる場所、小さかった子への親の自殺の事実の伝え方、などの子の養育に関する情報の欠如が死別後の不安と混乱をより一層複雑化させる要因となっており、特に子が幼い場合には後追い自殺が無理心中という形となって発生する恐れがある。成人した子がいる妻は、比較的、成人した子からの助けにより家庭が維持されているかのように見える。しかし、子の有無や年代にかかわらず、子からの常時の助けが得られなかったり、遺された妻だけでは抱えきれない困難があるように見受けられたりする場合には、遺された家族の事情をよく理解でき全ての解決の手立てを熟知した、先に同じ経験をした遺族などによる関わりが有効な場合がある。

一方、妻を亡くした夫への対応についても特段の留意が必要である。特に、遺された夫は、妻との突然の死別に混乱する中、男性としてしっかりと事後対応をすることが暗黙のうちに求められ、死別後に関わる関係者から厳しく当たられたり、的確な情報を入手し切れないままの状態に孤軍奮闘を余儀なくされたりする恐れがある。特に、未成年の子を抱える夫の場合、職場での責任が多い中、仕事、子育て、家事などを悲しみに暮れる中でこなしていく必要があり、子の学習上の不応や学校でのからかいやいじめ被害、不登校の時の対処方法、遺児の集まりや奨学金など経済的支援策、親の自殺現場を見てしまった子の症状や体調、心理、発達について相談できる場所、小さかった子への親の自殺の事実の伝え方、などの子の養育に関する情報を長期間に渡り入手し損なう恐れがあり、場合によっては子の後追い自殺の危険もある。

遺された配偶者に対する情報提供と支援に関する結論として、自殺と判明した直後以降で、警察や行政窓口をはじめとする既存の専門家や関係者が遺された配偶者の対応をした時に、遺された配偶者の苦しさに配慮した手厚い対応が求められた。具体的には、

既遂自殺の際に現場や病院に駆けつける警察は、死因が確実に自殺であると判断される場合には、その場でパンフレットなどの冊子を手渡すと同時に、目の前の遺された配偶者の癒しや予想される困難の解決に繋がる声掛けを実施することのできる最初の専門家になり得る。

また、遺された配偶者が必ず訪れることになる行政窓口の担当者は、遺された配偶者の背景や子の有無などを考慮し、期限のある手続きや労災申請の方法など個別の背景に応じた情報提供が望まれた。もちろん、状況に応じ遺族が安心して話すことが出来るよう個室で対応することも望まれる。

最後に、先に同じ経験をした遺族や、十分な研修を受け自死遺族支援に熱意のある専門家が、自殺と判明した直後から支援を開始し、遺族に必要と思われる支援の見立てをし、その後も継続的に遺族を支え、同行支援や代行支援を実施することが有効な場合がある。この際の留意点として、関係者は、家庭訪問を実施する際には慎重さと共に、死因が自殺であることが近隣住民に分からないよう細心の注意を払う必要がある。

本稿においては、遺された配偶者の目線に立ち、遺された配偶者から望まれた情報提供と支援について整理した。本研究により、自殺発生直後から時系列で遺族に接する可能性が高い関係者が、配偶者を亡くした遺族が望む情報提供と支援のあり方を具体的に把握し、遺された配偶者に特化した情報提供と支援が実施されることを期待する。

#### 参考文献

- 伊藤弘人（2009）『自殺未遂者および自殺者遺族等へのケアに関する研究』厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）平成18年度～20年度総合研究報告書，国立精神・神経センター精神保健研究所社会精神保健部。
- 大倉高志・市瀬晶子・田邊蘭・ほか（2011）「自殺者遺族が望む『情報提供のあり方』の探求－続柄を考慮した語りの比較分析－」『自殺予防と危機介入』31(1)，74-83。
- 大倉高志（2012）「自殺発生直後の遺族支援に関する文献検討－警察，死体検案医，解剖担当者を中心に－」『評論・社会科学』99，97-135。
- 大塚耕太郎・酒井明夫・小泉範高・ほか（2011）「自殺企図患者へのアプローチ Q&A と取り組み例で学ぶ救急ナースの役割 特集5 シーン別アプローチ③家族・遺族へのかかわり編」『EMERGENCY CARE』24(11)，37-42。
- 川島大輔・川野健治・小山達也・ほか（2010）「自死遺族の精神的健康に影響を及ぼす要因の検討」『精神保健研究』56，55-63。
- 川野健治（2009）「フロントラインの保健福祉関係者向けの『自死遺族を支えるために』の作成」伊藤弘人『自殺未遂者および自殺者遺族等へのケアに関する研究』厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）平成20年度総括・分担研究報告書，国立精神・神経センター精神保健研究所社会精神保健部，19-56。
- 川野健治・小山達也（2009 a）「自死遺族当事者の悲嘆およびケアへのニーズに関する調査研究（1）」伊藤弘人『自殺未遂者および自殺者遺族等へのケアに関する研究』厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）平成20年度総括・分担研究報告書，国立精神・神経センター精神保健研究所社会精神保健部，67-77。
- 川野健治・川島大輔（2009 b）「自死遺族当事者の悲嘆およびケアへのニーズに関する調査研究（2）：自助

- グループに参加しない自死遺族当事者のソーシャル・サポートと二次的被害についての検討」伊藤弘人『自殺未遂者および自殺者遺族等へのケアに関する研究』厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）平成 20 年度総括・分担研究報告書，国立精神・神経センター精神保健研究所社会精神保健部，79-87.
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂.
- Clark, S. (2008) Bereavement after suicide—how far have we come and where do we go from here?, *Crisis*, 22 (3), 102-8.
- Cleiren, M. P. H. D. (1993) *Bereavement and adaptation: a comparative study of the aftermath of death*, Hemisphere, 49-50.
- Glaser, B. G. and Strauss, A. L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Publishing Company. (= 1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見 調査からいかに理論をうみだすか』新曜社.)
- Krueger, R. A., Casey, M. A. (2009) *Focus groups: A practical guide for applied research—4rd ed*, Los Angeles, SAGE.
- 黒川雅代子（2007）「救急医療における遺族支援のあり方」『龍谷大学論集』470, A 57-A 66.
- 小山達也（2006）「自殺により配偶者を失った遺族の体験」『自殺予防と危機介入』27(1), 81-92.
- 厚生労働省（2000）「『社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会』報告書」『厚生関係審議会議事録等』（[http://www1.mhlw.go.jp/shingi/s0012/s1208-2\\_16.html](http://www1.mhlw.go.jp/shingi/s0012/s1208-2_16.html), 2012.10.13）.
- 佐藤郁哉（2008 a）『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- 佐藤郁哉（2008 b）『QDA ソフトを活用する 実践 質的データ分析入門』新曜社.
- 鈴木淳子（2005）『調査的面接の技法 第2版』ナカニシヤ出版.
- Sveen, C. A., Walby, F. A. (2008) Suicide survivors' mental health and grief reactions: a systematic review of controlled studies, *Suicide & Life-Threatening Behavior*, 38(1), 13-29.
- 田垣正晋（2008）『これからはじめる医療・福祉の質的研究入門』中央法規出版.
- 高橋千鶴子・赤坂博・及川友希・ほか（2008）「自殺発生後の集団に対する支援体制の検討」『日本社会精神医学会雑誌』（福岡国際会議場）17(1), 116.
- 高橋弘江（2010）「自死遺族が患者の死を受け入れるための家族担当看護師の存在と遺族支援チームとの連携」『EMERGENCY CARE』23(2), 72-8.
- 鷹見有紀子（2010 a）「死別直後・通夜・葬儀におけるグリーフサポート 葬儀に関わる皆様へ，遺族会からのお願い（上）」『仏事』（6月），40-6.
- 鷹見有紀子（2010 b）「死別直後・通夜・葬儀におけるグリーフサポート 葬儀に関わる皆様へ，遺族会からのお願い（下）」『仏事』（8月），47-53.
- 寺岡貴子（2012）「夫を自殺で失った妻に対する支援の検討－遺族会に参加している自死遺族へのインタビュー調査から－」『第42回（平成23年度）日本看護学会論文集 精神看護』42-5.
- 内閣府（2012）『自殺対策白書 平成24年版』新高速印刷.
- 長崎県自殺対策専門委員会（2008）「長崎県自殺総合対策：相談対応のための手引き集（「自死遺族への相談支援の方法」，「借金・経済問題への対応」，「メンタルヘルス問題への対応」）」『長崎県こども・女性・障害者支援センター』（[http://www.pref.nagasaki.jp/na\\_shien/manual/file/20120801121430.pdf](http://www.pref.nagasaki.jp/na_shien/manual/file/20120801121430.pdf), 2012. 12. 1）.
- Hawton, K., Simkin, S. (2003) Helping people bereaved by suicide: Their needs may require special attention, *British Medical Journal*, 327, 177-8.
- Hawton, K., Simkin, S., Rees, S. (2008) Help is at hand for people bereaved by suicide and other traumatic death, *Psychiatric Bulletin*, 32, 309-11.
- 森田敬史・瀬良信勝・坂口幸弘・ほか（2007）「宗教家による遺族支援」恒藤暁『遺族支援サービスのニーズと効果に関する実証的研究』平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書.
- Ritchie, J., Lewis, J. (2003) *Qualitative Research Practice: A Guide for Social Science Students and Researchers*,

## SAGE.

本研究では、FGI-1の実施に際しては京都大学大学院医学研究科健康情報学分野の運営費を、また FGI-2 と FGI-3 の実施に際しては公益財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団からの研究助成金を受け実施した。

---

## Bereaved Spouses' Expressed Hopes for Information after their Spouses' Suicide : Contribution to the Practice of Support for Bereaved Spouses in the Community

Takashi Okura, Emi Hikitsuchi, Akiko Ichinose,  
Ran Tanabe, Takeo Nakayama and Katsunobu Kihara

---

The purpose of this study was to ascertain bereaved spouses' preferences with respect to the timing of receiving information, who should provide this information, the kind of information given, and methods of receiving the information in the period immediately after the suicide. Focus group interviews were held three times, and these revealed that survivors wanted existing specialists in the police, government agencies, and other institutions to deal with them courteously and take their suffering into consideration when responding to them in the period immediately after the suicide. In particular, bereaved widows tended to be severely condemned in terms such as "his wife was the person closest to him, but she drove him to suicide," and had to deal alone with the difficulties their husbands were facing during life, as well as new issues that arose later. For this reason, it may be effective for other bereaved individuals who had previously undergone the same experience, or well-trained specialists familiar with the feelings of bereaved family members and the ways of resolving problems, to work with the bereaved spouse or surviving family members and act as intermediaries in resolving these difficulties. Further studies that focus on relationships are required.

**Key words :** Bereaved spouse after suicide, Informing, Support, Group interview

